

史料紹介 森本州平日記（五）

東京大学大学院
日本近代政治史ゼミ

はじめに

ここに紹介する森本州平日記は、昨年刊行された『東京大学日本史学研究室紀要』第十七号（二〇一三年）に筆耕した、一九三一（昭和六）年一月から三月までの日記（『史料紹介 森本州平日記（六）』）に先行する四か月、すなわち一九三〇年九月から一二月までの日記である。諸般の事情から、昨年と今年にかけて掲載の順番が前後したことをお断りしておく。次号からは正規の順番に復し、三一年四月からの日記を「史料紹介 森本州平日記（七）」として翻刻する予定である。

今回翻刻にあたったのは、二〇一三年度の大学院近代政治史ゼミに出席していた院生のうち、吉井文美、国分航士、朴完、團藤充己、中西啓太、樋口真魚、池田真歩、佐々木政文、有吉拓朗、梅本肇、吉田ますみの各氏であり、全体の調整と取り纏めを国分航士氏に、解題執

筆を有吉拓朗氏にお願いした。なお本号から解題を付すこととし、「はじめに」、「日記」、「解題」の順に配置した。

出来上がった翻刻原稿を原本と引き比べて、校正の労をお取り下さったのは、森本州平氏のお孫さんにあたられ、日記の現在の所有者である森本信正氏である。ご親族などの固有名詞の読解や製糸業関係の特殊な用語についてもご教示いただいた。お礼申し上げる。また、前回同様、今回の筆耕にあたっても、原本のデジタルカメラ撮影など種々ご尽力いただいた齊藤俊江氏、伊那近代思想研究会（森本州平日記を読む会）代表の松上清志氏にもお礼申し上げる。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体は原則として新字体に改め、読点濁点は適宜補った。不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家にかかわる私的な記述、個人に関する評価にかかわる記述などについては、〔中略〕あるいは**などにより伏せ字扱いとした。

森本州平日記 一九三〇（昭和五）年

九月一日 月曜

朝小雨、晴。二百十日の厄日なり。千章盲腸炎の手術するに付、見舞の為来伊せられたしと懇々頼まれたれは様子如何と朝七時下山村より電車にて出向す。伊那病院に着して見れば、昨夜十一時頃手術したりとて、千章西側の病室寝台上に横はれり。千章氣小にして、病を重し氣を患むる甚し。経過は重態なりと云ふべからざるも、氣息奄々として横はれり。家内召使等来集合して昨夜予の出向せざるを不足がましき様子なりしも、用事ありて来る事を得さりし由を告げたり。院長に面会して千章の病状を問ひしも、別に憂ふべき様子なし。盲腸炎加膿して破れ、膿膀胱の辺迄浸潤し居れりとの話なり。石井医師も高橋医師と共に執刀して手術せる由にて何の心配もなしとあり。

午後三時迄居合せて帰り、帰途宮田に立寄り山本父に面会し病状を報告して帰れり。

予記 天氣よく稍風ありしも豊年疑なし。

九月二日 火曜

晴。天氣よく暑氣強し。組合支所に行きて青山に面会し、種々相談せんとせしに青山来組せず。依て支所工場を一巡して去る。

聯合事務所に行き、中原を呼びよせて徳富氏来る十三日来峡し、講演してくれる事に決定せるに付、其れに関して打合をなし北原氏に其の件を電話を以て報告す。青柳日々記者も亦来り。蘇峯先生来講の件、打合をなす。蘇峯会の件、総会の件、委員会に関する件、ポスターの件等を下田に命じて作らしむ。

午後になりて銀行に出勤し、金田より欠勤中の重要事報告ありて後、

行務を見て午後六時帰る。

中原、市村両氏を銀行に召致して蘇峯氏来峡に關し、下伊那に於ける維新史の材料として何か参考となるべきものを蘇峯先生に見せ度しと、其蒐集方につき相談したり。多忙なる日なりし。

予記 天氣よく残暑強く豊作の兆あり。米価安し。一駄二十一円にて売る。

九月三日 水曜

晴、暑氣86。暑中に劣らぬ暑氣なり。朝組合支所より本所に行く。熊谷元茂蘭を売り、組合に対する借金を棒引にしてみらい度しとて、竹村要人を背景として組合に対抗して整理脱退をなさんと計画し、組合へ反旗を翻すと聞き熊谷元茂を呼びにやりて彼を説得し、組合の借金は一時には返せとは云はぬから徐々に返済して行く様に話し、是非供蘭はすべしと説きたるに、彼賄の苦痛を訴へたるも結局ワヤを云はずに供蘭すべしと勸説したり。

それより上飯銀行出勤す。下田を呼寄せ蘇峯先生に一覽に供すべき史料蒐集に関する手紙を出し方を命じ、猶其他思想史集金方をポスター等につきて配布を命ぜり。湧川店員和泉来行して出荷してくれと頼まれ、又振売を尽力せよ、然らば出荷すべしと話し置けり。午後六時帰宅して倫敦条約の枢府が不承認にならん事を神かけて祈る。国亡を一九三六年以後不安に導くものなれはなり。

予記 近來の国民も政治家も皆魔かさして居る。外交官にして特に然り。

発信 吉村広、徳富先生招聘の礼。江森太郎。

【語句の説明】湧川：湧川合名会社。横浜の内売込問屋であり、伊那

などの地方の製糸家から集まった生糸を輸出商に売り込んでいた。

九月四日 木曜

晴。組合支所にて青山専務と事務員交迭に付打合をなす。

次に上飯し、作興会の件につき下田を召致して打合す。大会通知書を出さしむ。徳富先生に展覽すべき史料蒐集方を予の名を以て頼む。

銀行出勤午前十一時なり。

秋蚕を飼はされは家内一般に閑あり。掃除等行届き米倉の二階、表庫、三階倉、道具倉等信也全部下男を指して掃除片付出来たり。

組合の仕事も大事にて考ふれば此不況に際して難事業多し。

【語句の説明】秋蚕…あきこ、もしくは、しゅうさん。特に七月下旬から晩秋にかけて飼う蚕。松尾村では明治十年頃から秋蚕飼育が開始され、明治二十年代に定着、三十年代に入ると収穫高で夏繭を超えることになった。南信地方では春、夏、秋、晩秋の四回飼育した村が多い。

九月五日 金曜

晴、北風。北風涼風吹き、気澄み渡りたるも冷氣俄に加る。

組合支所より本所に行きて見る。店頭秋蚕多忙の折柄寥々たり。清水敬一が何かやつて居るのみなり。木下房吉は秋蚕にて欠勤し居りて淋し。工場を一巡し干燥場等を見て銀行に上る電車中伊原久吉に会し、漁業組合の模様が付聞及び、六日警察署長が三信鉄道との間に入りて口を聞く事となりたる由聞及ふ。次で兼て千代龍江の漁組連中が警察へ押寄せたる件は、予が田中組長に旨を授けて、警察署長を中に入れて口を聞かしむる事としたる旨を話す。

銀行にては、午後五時迄平常の通り事務を見各支店に秋蚕上りて利子収納方を命する旨令を出さしむる事とせり。青山専務に会ふ事を得ず。清野亀之助の整理に付、清水を差向けたり。本支所事務員整理に付、専務と打合せたり（四日）。

予記 信也東都遊学す。午後八時夜行出発。

【語句の説明】三信鉄道…一九三六年、全通。矢作水力・東邦電力・豊川鉄道などの電力会社が、下伊那郡の泰阜・平岡などのダム資料運搬を目的として天竜峡―三河川合間を結んだもの。

九月六日 土曜

晴、北風。冷氣一層増して、浴衣では寒く、朝夕セルを出して着る。

組合支所より漁業組合にて三信鉄道と漁場を工事の為荒らされるとて其損害の賠償を請求して居た（八月廿日頃は大挙して千代、泰阜、龍丘の連中が七十名計り飯田警察迄押し寄せた）が、此問題に付交渉があるから伊電飯田出張所迄江塚に出張を慫慂して予も同伴上飯した。

午後一時から作興会の委員会が開かれた。小西飯田町長は予が此際国民精神を作興するに付、工体案の研究を総会の議題として議したいと話した処か、「それは作興詔書に明であるから其れを実行せは足る」との事であつた。然らば其実行方法を研究すべく総会に於て研究したいと話した。小西は此会合に反対の口論を洩した。次で蘇峯先生来飯の段取りや蘇峯会の事や作興会の件につきて相談して午後四時半散会した。

北原阿知之助と（中原か病氣たと云ふので）中原を慰問した。菓子奩箱を持参した。北原は中原に触手療法を試み之を側て見た。南信社に重役会があつたが欠席した。

予記 如何にして作興すべきかの問題に付ては掛川、芝原両校長から私案が出た。之を基礎として研究する事とした。

【語句の説明】①伊電…一九〇七年、伊那電気鉄道株式会社として創立され、一九一九年、伊那電気軌道に改称。一九二七年、中央線辰野―天竜峡間が全通。

②小西飯田町長…小西吉太郎。

九月七日 日曜

晴。組合支所に行き午前中居りて大梓場の能率に付研究せり。午後龍門寺を経て本所に行く。工場及構内を一巡し、貸借表等を見、山本をして清野との交渉問題を交渉せしむ。

組合の事務員の転任解任等の事に付ても充分考慮し、古参の者より順次退引せしむるより外なく、其の候補者として大沢、清水を挙げたり。

午後四時半本所を辞して富民協会の競作田明の中村深治郎の田を視察して帰る。無芒愛国を作りたるも到底十石取は六ヶ敷く先つ五石八斗位なるべきかと思ひて帰れり。

手帳を紛失せり。

徳富氏来飯の件につき種々考へたり。

【語句の説明】①大梓場…大梓を中心とした揚返機械が置かれていた場所のことか。大梓とは、周囲一・五メートルの木梓。紡績の方法として、繰糸の際、生糸を大梓に巻き取つて総とする大梓直繰法と小さい繰梓に巻き取つた生糸を大梓に巻き返して総に仕上る小梓揚返式繰糸法の二つがあり、日本では後者が多く用いられた。

②富民協会…一九二七年六月、本山彦一によって大阪に設立された財

団法人。農業副業に関する書籍やパンフレットを発行するほか、多額の賞をかけて多収穫を奨励した。

九月八日 月曜

晴。気澄み秋高くして朝夕冷涼なり。秋天高く快よし。

組合支所に行く。青山江塚等と出会ひ雑談す。午前十時金田より電話ありて上飯せり。中原の病気を電話にて訪ねたり。片桐寿来行して蘇峯先生を本学神社に参拝する様、取計ふければ何とかして街道より神社迄先生を曳き上げる工夫をこらされたし。又神宝等持参して展覽に供すべく用意せらるべしと告げ、快諾して去る。又三浦来吉来行して何とか銀行の借金を延期する様尽力方を頼まれたり。放課後に至りて片桐、原田と財界の変調期に際して雄飛せんとするは將に此時なり、何とかよき方法はなきかと戦争法方と処世問題を結付けて、予の持論戦斗法方か立体的になれば処世術も亦立体的にならざるべからずと説き、処世哲学を講したり。米倉全部空きたり。米代一駄に付、二十一円にて売れり。買手松岡屋。

予記 犬塚利国、来訪。

九月九日 火曜

晴。山本へ熊谷伯母来り、永く滞留する由を聞き、久しく前より一度訪問せんと思ひ居りしも其志を遂げ得ず居りしが、山本よりも是非一度来訪せよとの言伝もあり訪問する事とし、放課後六時訪問す。山本は何時も山村の趣ありて、秋草深く茂り居り、道路も悪しく夕日既に没して紫の霏につ、まれんとする秋の夕暮であつた。父は南の堀の根に干草を掃き集めて居た。カルサンをはいて、伯母は隠居の縁側に

出て洗濯物のツギをして居た。秋蚕を養蚕部屋に兄と嫂とかかつて居たので見た。カッゴか出ると云ふて居た。繭は安し。養蚕の具合は悪し閉口したとの事であつた。秋の種を父、伯母、兄夫婦等と語り明かした。静寂な氣に打たれて一泊をした。

作興会徳富氏を聘するので先生に贈物や、会場や、待遇や色々で銀行の用務も半々であつた。

【語句の説明】①カルサン：輕衫。袴の一種。中世において袖細の袴が南蛮文化の影響を受けてカルサンと呼ばれるようになり、近世中期以降、農民服として着用される。寒冷な地域に多く用いられ、男女共にはく。

②カッゴ：カッゴ。硬化病にかかった蚕を指す方言。

九月十日 水曜

晴。朝夕稍冷氣を緩和す。朝九時山本を辞す。熊谷伯母の身の上を察し、金拾円を小使錢として贈金せり。帰途山本組合に河井組合長を訪問し其製糸工場を一覽せり。夏繭を繰糸し居り、一日工程五本位なりしもセリブレーション点数は意外に良好なるものを作り居れり。午前十時半銀行に出勤す。頭取帰行し□県会の模様も別に話はなし、只予が入歯をはづし居りしに対して叱したり。威張ることは元の田舎大臣の如き頭取なり。午後二時聯合事務所へ中原を召致して、来る十三日作興会総会に於ける申合の原案を作る、芝原議長も幸来りたれば合同して案を謀り、主に經濟問題よりは思想問題に重を置きて決定事項を作りたり。

夕刻七時帰宅す。

【語句の説明】セリブレーション点数：セリブレーション点数。糸むらの検査

の際に使用された点数。

九月十一日 木曜

晴。残暑再び強くなり低氣圧（西伯利）去り、天氣よき日続き桑は萎まんとして居る程となる。降雨を希ふて居るけれども一滴もない、申分ない二百廿日である。

組合支所を経て上飯した。作興会の用件で種々の事務をなした。喬木村長からも富田絹の事で話があつたが、当地と間に合せたからよいと断つた。青柳日々記者も来行して蘇峯会の事や講演の事に付て打合せした。放課後市村氏来行して、蘇峯先生接待役や史料の説明役として頼み、又蒐集史料に付て種々相談した。帰途龍門寺を訪問して市村や伊沢も遇ま会合して布教伝道講を止めるより外ないと相談した。作興会の事は考へれば考へる程、冷汗を覚えた。如何にして此難業に献貢し得るかを考へさせられる度毎にイヤになつたが、始めた仕事今退くわけにも参らぬ。

【語句の説明】富田絹：下伊那郡喬木村の筒井サキノが発明した薄絹。

九月十二日 金曜

晴。組合本所より上飯、聯合事務所に明日の作興会事業の打合の為、午前中居りて午後銀行出勤す。蘇峯先生に見せる史料の蒐集に骨折れり。一般作興会に關して町村長の熱心の度うすぐ思想問題か如何に日本に渦巻き居るか等は全く輕視し居るもの多し。嘆くへき哉。

予記 政府と軍令部との意見一致したるや否や。倫敦条約は国防上支障なきや。国民負担の軽減は如何。

社会の今日 枢府と政府との間、喧嘩盛なり。政府は多数党を要して

頑固に主張をはる。

九月十三日 土曜

晴。午前八時聯合事務所に出頭し、作興会総会の用事蘇峯先生講演の支度等せり。作興会総会は出席者少く三十名計りなり。予定の通り申合を協議し原案を先に呈示して其に付て論ずる事とせり。一瀉千里進行して申合原案通り決せられ（委員を挙げて、七名）たり。其間館林警部より思想問題に關して講演あり終了す。

蘇峯先生を駅に出迎しが直に天竜峽へ行く事に変更し吉川と共に天竜峽を案内す。橋を渡りて下の岩の上に立ち写真をとる。日々新聞社の連中のみなり。ホテルに急ぎ昼食して二時の講演会飯高講堂に至る。聴衆堂に満ち、外に溢れるもの三五百人あり。北原会長開会の辞を述べ、平川日々新聞整理課長新聞の出版に至る経過を話し後、蘇峯先生の講演に移る。皇室中心主義を説き孝明、明治の両天子の英明を説かれ歴史を重んずべき事日本人はハゼの如くウノミにする等皮肉を並べ、日本人は偉大なる国民なりと論せり。

終て直に三宜亭に蘇峯会を開き五平餅にて雑談に入り、夕刻蕉梧堂に帰り市村氏を主として史蹟史料を集めて之を一覧せしめたり。夜十二時帰る。

九月十四日 日曜

晴後雨。朝八時、蘇峯先生山吹本学神社に参詣して上片桐駅へ送るので、午前六時半出発して蕉梧堂に至り大塩中斎の書幅の鑑定を見推奨措かず、八時自動車を列ねて小西、北原（河）（源）、中原、原貞、市村等と予は本学神社に案内す。地元にては片桐、平沢、山田等山駕

籠を作りて出迎え、蘇峯夫妻をのせて山路を上る。其の様態面白く、地元の青年之を押く。本学神社前に至りて夫妻神官によりて玉串を奉奠し参拝し神宝を一覧せり。蘇峯先生日本書紀一卷を神社の書庫に寄進せらる。見晴しよき処に台を設け茶菓、芋、豆等の接待充分つき居りしも偶ま雨降り出し休憩も出来ずして下山す。片桐駅迄送りて他は帰る。

予は伊那町迄送り中学校に於ける講演会に臨みたり。先生の講演は日本民族運動の為階級闘争の不可なるを論し皇室中心を説く。都て飯田に於て語られたき事なりし。終つて蘇峯会六十名発会式簡單なる茶菓にてあり。予は千章を病院に見舞て午後四時帰飯。青柳氏に面会し送り届けるもの宿へ茶代等話し仙寿楼に於ける松本実業家団の歓迎宴に出る。

予記 松本より木曜会とて実業家其他有志より成る団体の来飯あり。百十七楼上にて休み天竜峽へ舟て行き帰て仙寿楼に歓迎会あり出席す。日銀支店長、松沢等来れり。

社会の今日 枢府と政府と倫敦条約て衝突、審議不能となる。

【語句の説明】蘇峯会：徳富蘇峰を後援する目的で一九二九年に創立された団体。会長は神宮皇學館学長上田万年。四十道府県にわたり支部を設立した。創立当初、会員数は約二千四百名。

九月十五日 月曜

雨曇。組合支所にて湯川泉次郎父死亡の由を聞き弔電打つ事、香奠の事等を聞きたり。一巡して上飯す。醤油屋の競争激しく併も低級の競争にて砂糖を付けるもの木炭を付けるものもありたり。伝馬町松岡屋の挑戦にかゝるものと云ふ。組合も多少の価下をせずはなるまいと

思ふ。

前沢栄太郎、宮下三郎の兩人予を訪問し來行し、宮下武男の仮差押の件に付話ありたるも行員に一任せり。重役会を開き吉川、太田、山口の三重役來行して議す。今宮の花火上り一二本見て帰る。

湯川泉次郎へ弔電打ち又香奠金五円為替送金す。

不景氣くゝの声のみ高く一般のもの此声に恐れて益々萎縮するか如くなれば、紳士は決して不景氣を口にせず隠忍すべきであると人々に話せり。併して此不況を突破する事肝要なり。

吉村広、本山彦一兩氏へ蘇峯先生來峽の札手紙を書く。

発信 吉村広。本山彦一。

九月十六日 火曜

曇。支所を経て銀行に出勤した。

中原に上京を促した。併し彼は財政的方面から行けぬと断つた。又岩崎篤にも同行せぬかと問ふて見たが彼も亦断つた。国の為ならば水火も辞せぬと云ふ友人を作つて置く事が肝要だ。敢て多人数は要せぬ。只三四十名の刎頸の交を要するのである。伊那の峽谷に三四十人の此の如き同志があれば総ての問題は解決する。国家の事でも三百人の命迄も国に捧げる同志あらは回天の事業何で難からんや。

九月十七日 水曜

雨、曇。支所より銀行に出勤した。放課後幹部が種々打合して五時帰宅して夕食をして上飯した。林雅治より南信新聞のパスを借りて上京する事とした。上京の要件は組合の用と私要「用」だと云ふて置いた。愛国勤労党等とは一言も云はなかつた。中原のみか其辺の事は知

つて居た。予は倫敦条約問題で、或は東京に於て大示威運動でもやるか或は地方のものを集めて党としての抗争でもやるか、兎に角無事では帰られんかともしそかに考へて上京した。一般の地方の人は三靈社の花火だと云ふて、全く此亡国的条約が今日枢府と政府との間に論せられて居る事や日本が亡国か興国かの岐路に立つて居るか等は全く知らずに花火を興して居た。其間を独り黙々として追ひのけて午後八時廿七分飯田発て上京の途に付ひた。三靈社の花火はドン／＼出て居た。電車の窓からも見れたか冥黙して飯田を出た。

【語句の説明】①愛国勤労党：一九三〇年二月、結成。下伊那では一九三一年、中原謹司が中心となつて愛国勤労党南信支部を結成し、後に二百四十名の勢力となつた。

②三靈社：長姫神社の別称。一八八〇年、創建。

九月十八日 木曜

雨。朝七時駿台荘に着いた。一浴して朝食を終つて丸ビルに皆川巖氏を訪問して、思想史を見せて売込方尽力を頼んだ。併し在京の出身者に周旋してやると云ふた。江刀書院は出版はするが販売はしないと云ふた。又財界の悪傾向等と地方の状況に付ても話した。

去つて東京日々に西村広を訪問して小林焼ボーフラを贈り蘇峯先生を頼んでくれた札を述べた。雨か降るので十五分位で横浜行を思ひ立つて横浜に行つた。

横浜では湯川商店を先つ訪問して不幸の見舞をした。丁度荷糸の話もして二十日後として三井物産へ三十斤納める事に話をした。又ベケ糸を返送してくれとの話もした。New Grand Hotelへ案内せられて旅館内を一覧し、和泉の案内で昼食を供された。丁度吉田の宮島氏も居

たので一所であつた。それから神栄を訪問して補償糸の話をして正金銀行から手紙が行つても神栄の店へまかしてくれと云ふて居た。川口の案内に原合名を訪問して支配人に会ふた。又片山氏にも会ふて話した。片山氏は先般来峽した礼があつた。それから帰京して青山の神宮講本部に行つた。京都の福島、和歌山の矢田、会津の矢部、上州の栗原其他十名計り全志が集まつて居た。予は会議の座長に推されて会議を座談的にやつた。追々集まるものがある様であつた。其中京都の福島氏は聞くより若い青年で、併も美青年であれ程の頑健な奮斗をやる男とは思はなかつた。種々地方の状況も話が出て党此後の方針等も図つた。併し綾川氏や其他発起人が（中央の）出席が少なかつた。之れは政党としては未だ産れ方早かつた様にも思はれぬでもなかつた。

其質問もした。議長であるので規約や党則、綱領等につき思ふ事を述べかねた。それから夜に至る迄種々の談にふけつた。併し幹部の変化するのは其間に何か暗闘か面白くない事があるのではないかと考へた。遂に遅くなつたので神宮講本部に一泊する事となつた。

党則、綱領、政策等も議したか政党としては貧弱であつた。

【語句の説明】①駿台荘：長野県出身の犬塚雪代が経営する旅館。一

九二六年創業。著名作家の投宿先として知られた。

②ペケ糸：輸出生糸格付検査の不合格品。

③神栄：神栄生糸株式会社。一八八七年創設。本店は神戸。

九月十九日 金曜

雨。神宮講本部へ一泊して朝八時迄疲労を通した。既に京都の福島、和歌山矢田等は起きて朝食を終り、京都に於ける倫敦条約反対の運動につひて福島君がやつた話をして居た。上州の栗原と予の対談は実際

問題生活問題が多いので青年等は面白からなんだ。雨も降つて居るので菓子を買ふて来てかじりながら青年等を相手に午前中話した。

清人を訪問せんとして宿を出たが増恵からの注文もあり正午に新宿中村屋に於て昼食をする約束になつて居るので三越を見て二三買物をして中村屋に入つた。中村屋は印度人ボース氏が経営して居る喫茶店である。ハイカラである。髪の毛の長い学生等が満頭を食ひに来て傍若無人に振舞つて居る。亡国的傾向を此等の学生によく見受け得る。彼等を遊学せしむる父兄等は莫迦気たものである等を考へて、手紙を二三通書いた。其内に前の福島、矢田、栗原等が入つて来た。中谷も来て鹿子木先生は是非自宅へ来てくれと云はれるから是から自宅へ行かれたしと遂に中村屋を出た。

同勢八人、目黒の鹿子木先生宅を訪問した。予は印度の話を開かんとしたが先生は印度ではない日本か今や亡国の岐路にある時だ、と語気を激しく云はれた。予もハツト思ふて印度の話は止めた。先生は日本亡国の条約が枢府と政府との間に論せられ今や枢府は之を認めたと新聞に伝へられて居る、一体今の日本人はどうしたのだ、大和民族の発展は阻止せられんとしつゝある時に享樂を事として居る。富家も労働者も、富者も貧民も、互に鬨牆の争をして国運は愈々衰亡の淵に沈まんとして居る。

九月二十日 土曜（十九日の続き）

若し此有様に行くならば、明治大帝の壮図は水泡に期せんとするのである。一つも起つて此大切な時にカン「敢」然国民に呼びかけるものがない。日本は亡国より外にない。諸君の様な若い人か立つて国を救ふより外ないのだ。若しも吾々の此運動が効を奏せぬならば日本は

救ひ様かないとあきらぬるより外ないであらふ。独逸の社界〔会〕党は十一名の少数党より愛国心のもゆる青年の力によつて百廿名となつた。吾等の運動も同して此独逸の社会党の運動の如くしたい…、と最も禁張した態度と嚴肅なる態度を以て云はれた。我等皆感憤した。

予は印度の談を中止して、予の、倫敦条約を若し批准せられざる時は国際信義なるものは蹂リン〔躪〕せらるれとも国家の方か国際信義より重いから批准遊はされざる様致したいものであるが、若し批准せられざる事とならば其影響如何と問ふた。勿論そうである。国際信義等海外新聞の様に云ふべき時ではない。枢府の連中も見下け果てた連中である。新聞の伝ふるか如きものであるとするならば、…。予は又問ふ。若し批准か出来んとすれば英米は我に猶一層の脅迫するであらふ、併し脅迫すればする程日本の敵ガイ心は熾になつて恰も日清戦争の後今後の敵は露国なりと云はれた様に国民の仮想敵が出来て猶一層日本人を覚醒するによからん、眠つた亡国的にマスイしつゝある国民を呼び起すに好都合ならん、…と云は、先生曰く、其通りた、何とかして此腐敗せる政事家、権勢家をやつつける方法はないか、此の売国的政府には納税は出来ないと不納同盟をやる事は如何と云はれたから、其点は却て後に悪例を貽すからよろしくないでしょうと答へた。先生の論は徹して居た、嚴肅であつた。各人より地方の状況を話した。日没頃になるので辞去した。

雨は降つて居た。それから明治神宮へ参拝して予の音頭取りて左の通りに大声で明治天皇の御霊の前に祈を捧げた。「倫敦条約はどうぞ絶対に批准遊はされぬ様に神明に御祈り申す」と一同十名の者皆連て捧つた。それから日本新聞の食堂へ行つて夕食をして分れた。鹿子木先生は嚴肅なよい先生である。曾て飯田へも来られたと語られた。

福島君から京都に於ける財部海軍大臣桃山御陵参拝の節、倫敦条約反対に付ての運動状況を先生に報告した。先生は一から十迄現代日本の状況は亡国的だ、生活も全く一新せねはならぬと力説せられた。

午後十時の汽車で帰つた。駿台荘から直に飯田町へ来て夜行で朝七時半伊那町へ着いて千章を訪問し、又捷代を訪問して牧内ヤス子の安産を祝した。祝盆を挙げて出産を祝し午後二時銀行へ帰つた。

九月二十一日 日曜

晴。午前中鹿太郎が来訪して百姓の話をした。彼は「蓮柄」を持参した。母は升屋の法事に午前九時半に出かけた。予は組合支所に行つた。午前中支所に居た。

秋蘭が入庫した。其の蘭は良く春蘭に似て居た。受入主任が出勤してよくやつてくれて居た。大衆新聞記者が来て新設以来の御参をするから寄附してくれと迫つた。元より大衆新聞は無産者の新聞であり階級意識を高張する吾等の主張とは反対の新聞である。日本の此国状を以てして階級闘争等すべき時ではない、従て此新聞とは主張を全く異にするけれども余り反対するのも面白からずと思ひ、金三円を寄附して置いた。

本所に行つた。青山は居なかつた。工場や干燥場を一覧した。書類等も見て役員会の開会を命じた。工場で教婦や主任を集めて能率と糸目との関係等を研究した。午後七時に帰つた。本所九百貫支所七百貫の入庫があつた。吉川会計理事出勤して居た。

予記 家内中で来る廿五日住江堯甫の法事の相談をした。

【語句説明】 大衆新聞…信濃大衆新聞。北原亀二ら政治研究会下伊那支部（LYLの後身団体）の幹部によつて、一九二六年創刊。

九月二十二日 月曜

雨、曇。支所へ行く。繭受入季に入り本支共受入数量七八百貫に及ぶ。支所にて専務と事務打合せたり。横浜の生糸の状況、仮渡金、正油値下に関して打合せたり。午後に至りて上飯せり。林来組し、上柳土地売込に付て奔走しつゝ、あり。上柳を銀行に呼び金田より土地売渡の件相談し、千代田商会減資其他事務に付ても小言を云へり。中原銀行に來りて勤労党の件につきて打合をなし東京の状況を話せり。倫敦条約の重要話と、此際何とかして御批准なき様聖慮を煩はす法方〔方法〕を講したりしが、地方としては如何とも致し難ければ中央に於て運動し、最後には明治神宮に祈りて参籠して神に祈るより外なからん、有志大官に此旨を奏し何とかして御批准なき様手段をとる事を打合すより外なからんと結へり。

堯甫、住江の法事の相談をなし極めて、簡素なる法事を廿五日営む事となす。

社会の今日 生糸六五〇円となる。借りたものを払はん様な事のみ伝へらる。

九月二十三日 火曜

雨晴。組合に役員会を開き秋仮渡の件、醤油値下の件等打合せたり。午前中本所にて会議を開く。午後上飯し銀行に出頭せしも店頭極めて閑散なり。新規貸出はせず旧貸整理のみなす。生糸価暴落し六五〇円となる。

聯合事務所に於て部会役員会開かれ出席す。其席を以て市瀬中原と会见し、軍人会にて倫敦条約問題に関して講演会を開催しては如何、本多熊太郎、平田普作氏を招聘すれば斡旋すべき旨を伝へ、倫敦条約

批准せらるゝとせば国防上大欠陥を来す事、及兵馬の大権は政府に蹂躪せらるゝ事を市瀬に話し何とかして士氣を振作しては如何と諮る。併も、彼の意中何の影響なきもの、如し。

それより産業部会に出席す。産業部会に於ては決算其他の件に関して種々評議ありて後、県より杉原課長來りて県組合製糸協会に費納入方を慫慂せり。併も其費用莫大にして一釜当り金一円なりと云ふ。議論百出せしが四年度として五十錢を分納する事となり組合長會議に諮る事に決す。後にて仙寿楼に宴あり、松下に会い***問題を話す。結局整理出来ずして倒れるものなり。丸山鶴弥來訪し黒沢の件を話す。

九月二十四日 水曜

快晴。亡き子供の法事すとして組合も休みて障紙の切張をなす。大雄寺へも電話にて來り供養する事を頼み、下男をして買物に上飯せしむ。亡き子供等の法要をすると云へは彼等の臨終の事等目の前に現れて涙ぐましくなるのみなり。組合へ電話をかけて行き和泉店へ如用〔薯蕷、あるいは、上用〕満十〔饅頭〕、三十ヶを注文せり。近來組合へ足を運ぶにも何となく物ひましき感しせり。経済界の不況は一層甚しくならんとし、秋繭は二円三十錢にて取引せられ農村に失業問題八釜敷く起らんとしつゝ、あり。終日家居せる事は稀なれば何となくのんびりしたる心地なり。秋の静けき日和に終日木屋の香のだつよう家に居れば心地よし。奥の部屋の神壇の前に仏壇を作り、二人の遺牌を出して飾り花を生け、団子を作りて献し観音經一卷を読む。

居間を片付け書類の整理をなす、富田、満鉄より紐育詰となりて行くとの事に送別の辞を送る。

発信 富田租

九月二十五日 木曜

晴曇。丸岡屋の依頼により銀行へ午前九時出勤す。黒沢整理の件につき丸岡屋其債務を履行する事となり、土地を入担して千四百円を支出す事となり信産B〔銀行〕に責められたれは、逃れて百十七Bに來りたるなり。結局千弍百坪の地を入担せしめて千四百円を作る事となり、丸岡屋安心して去る。

此件を終へて法事をするからとて閑を乞ひて帰宅すれば、名古屋新聞飯田支局員なりとて三名計の者揃ひ來訪し寄附金を依頼せしも、今日は取送り居りてとて断る。法事は午後二時大雄寺和尚伴僧一名を連れ來り、宮沢彌、牧内伯母の両名來りて会し、市場鹿太郎を招くのみ。増恵の手料理にて終了す。

母の願にて此法要を終りたるなり。住江の改名遺牌に記しあらすとて母主張し、之を寺に問合せたるも刻しありたり。終日家居せる事少し。

発信 綾川武治、条約問題。富田租、渡米。

【語句説明】信産B：信産銀行。一八九七年、飯田町に創立。一九四〇年、同じく飯田に本店を持つ百十七銀行・伊那銀行と合併し飯田銀行となる。

九月二十六日 金曜

雨。宮沢彌と牧内伯母の二人の客泊り、朝接待して居る中に丸岡屋來訪して、黒沢問題に付加判を頼み且金策に來れり。秋山來訪して、八ヶ島竹林造成に関し県より補助金あれば九月中に殖竹すべしとて招き、造成に付き協議せり。弁天橋本屋にて土地所有者集まりて協議をなし、母竹の購入方を図る。

午前十一時上飯して銀行にあり。中原来訪して、海軍縮少の倫敦条

約問題に付ては軍人会としては予算なければ与し難しとの返事あり、又最近思想史材料を蒐集し編著したれは出版方松本支部へ申込たれは不日出る旨話あり。彼上京の件につきて打合せたり。銀行を放課後大雄寺を訪問し、昨日法要來駕を謝し、礼として金三円贈る。泰邦和尚の病床を訪いて面接し、白隱和尚の話等せり。〔後略〕。

予記 宮沢彌帰途銀行に立寄り、上島の白隱の達磨の幅を****にて買受たり。

発信 佐竹達、倫敦条約反対の旨申送る。宮沢彌。

社会の今日 世は亡国の淵に転々として落下しつゝあり。経済界は委縮危機に瀕す。

九月二十七日 土曜

晴。午前中組合支所にて供齋状況及其他を視て、午後一時銀行出勤す。頭取腹痛にて欠勤し居りたり。店頭閑散たり。県経財界不況甚しく、糸価定期六〇円台を割り、最優実物六二〇円位となる。放課後蕉梧堂ホテルと吾行との野球仕合ありと聞き、商業学校運動場に行きて見物す。野球は頭と体との競技なり。外国摸倣の遊戲なりとて之を貶せしも、見れば面白し。

午後七時頭取邸を訪問して枕頭にて面会す。おツネ様來飯し居り、夕飯を供せられたり。後より米田芋一貫目を贈り置き。四方八方の話をして帰る。

牧内伯母逗留し居る。

彼岸道作りなり。秋に入れば年貢問題に付諸所に小作地主問題抬頭せんとの予感なきにあらず。

九月二十八日 日曜

晴。組合支所にて小林又次郎整理問題に付き口をきゝて、其入担品、土地を引取方交渉せり。午後に至りて龍門寺を訪問し丘山和尚に面会して、布教伝道講話人惣代を吉川芳太郎に頼む事を和尚をしてなさしむる事に話せり。其他雑談に一時間を費して後本所に行く。

秋蘭本支共六百六十貫位入庫し、其合計一万八千貫に達す。本所の状況を見巡りて午後七時迄居りたり。購聯より羽生某来りて購聯の話ありたり。仮渡金秋蘭一貫目に付金貳円なれば農民困憊すれども、未だ野に仕事あれば失業に至らずと雖とも、寒天に入らば人氣愈々悪化すべしと思はる。〔中略〕増恵座光寺行にて一泊し帰らず。

九月二十九日 月曜

晴。組合長会議聯合事務所にありたれば、朝直に銀行に出勤し丸山鶴弥の来訪をうけ、彼と共同振出にかゝる手形金（黒沢救済）約千四百円を渡して、彼に種々の注意を加へて渡したり。彼は其金に私地より二千円を足して農工を払ひ、田町、宅地、建物を銀行団に提出する筈なり。

午前十時より組合長会議開かれ、全国購聯増口の件、肥料給配の件等協議し、最後に秘密会として製糸組合のみにて工賃夏挽平均を五十銭、最低を貳十五銭と協定し、十月分より之を勵行する事に決したり。午後一時頃菅沼、塩沢、茂木立の三人来訪し、農工銀行を経て農会より借入れたる農家組合低利資金の百十七銀行より借入方に付話ありしが、銀行にては目下貸附を止め居れば如何にも致しかたきに付、此際各個人に割宛て他より何とか隔通して処置するが最もよき方法〔方法〕ならんと献策して返したり。

九月三十日 火曜

晴。組合支所にて****家整理に付話す。以前の交渉を變じ、信雄の借金迄も彼の借金中へ混して話さんとの彼の計画なれば、断然拒絶せり。午後一時銀行出勤す。県よりも組合受入蘭一釜当り三百貫を超過するものに対して一貫目に付二十銭以下を補助する筈なるも、当組合にては供蘭なくして此補助をうける事能はざるべしと思はる。久し振りにて頭取出勤す。万事報告し種々打合をなせり。

黒川来訪したり。夜一泊して翌日去る。〔後略〕。

予記 山口英九郎より琦玉薯一俵送りくれたり。

社会の今日 糸価貳円を破り一円七八十銭を唱ふ。米は白米一俵九円位。

十月一日 水曜

曇晴。組合支所へ行きて見れば木下千之助、塩沢広太郎、松村倭一等居合せ、青山専務と話し打合せて、午後銀行出勤す。組合員の経済極度に不良に陥り、秋蘭一貫目一円七、八十銭唱へらる。生糸は最優格五百六七十円（マヤ）なり。好景氣時代の反動來襲し、蚕糸を以て生計を建てつ、あつた報がテキ面に来り、秋蘭三十貫を組合に持ち込みても僅に二円の仮渡なれば六十円しか貰へず、利子等を差引かば残る処は何もなくなる様にて、ミジメなるものなり。

銀行放課後幹部を集めて、公債下落する様なれば売却の相談をなす。然も数日前此話をなしたる頃より除々に下向の傾にて、予は外貨、内債を買入れ肩代りする事を主張したるも頭取は肯せず、兎に角売却十万円する事に決したり。伝馬町支店長小原を招きて千代田商会の決算に付相談せり。

下男久男、山本へ帰る。牧内伯母滞留中なり。

国勢調査あり。牧内伯母滞留中に付届出り。

黒川一泊して去る。

予記 倫敦条約の如き国防無視、大権干犯問題を惹起したるか如き条約は批准せられざる様神に祈りしも、遂に枢府は「政府の言を信じ」との口実を以て是認する事となる。枢府は唯事実を調査して是非善悪の判決を下し陛下に奏上すれば足る。政府の言を信じ云々は其職責を誤れるものなり。

社会の今日 国勢調査あり。枢密院本会議あり、倫敦条約御批准の事となる。万事休。

十月二日 木曜

曇雨。一日の枢府本会議に於て倫敦条約問題 陛下御親臨の下に開かれ、石井氏の何か議長に小言出てたるのみにて、全会一致御批准あつて然るべしとの奏上をしたと伝へらる。日本国民の大勢既に帝国憲法を英国流に解し、天皇は只虚器を擁して兵馬の大権も国防も皆政府にとり上げ奉つた。此国体を無視せる憲法の解釈に従ふの傾向なるによれとも、一人も進んで此誤れる国体無視の大勢を阻止するものなく、満場一致只單なる国際信義等云ふ事や国民負担軽減等言ふ馬鹿らしき言動に左右せられたるは返す／＼も遺憾なり。「嗚呼日本は何処へ行く」と嘆せざるを得ない。朝腹痛にて臥床す。組合へも行かず居りしに午後治したれば、昨日の国債売却の件もあり、午後出行す。前島来訪し、***整理の件を辞し度旨申出たるも、到底思ふ様に整理出来ざればそれ迄傍観してくれと云ひ置けり。夜に入り吉川来訪し、所得税調査委員に出てよと云ふ。いやだと答ふ。押問答ありしが出馬の意

志なしと答へたり。吉川去る。

予記 父長野県庁へ赤十字社の要件にて行く。午前十時発八幡より出発す。所得税調査委員はいやだと答ふ。

【語句の説明】所得税調査委員：所得税の算出基準である各個人の所得額（年収）を確定する過程に参与する役職。税務署管内の所得税納税者同士の互選で選出される。納税者の不満を緩和するためとして所得税成立時（一八八七年）から設けられている。市町村ごとに人口に応じた選挙人を選挙し、続いて税務署管内で選挙人が調査委員を選挙するという複選制だが、それぞれの段階で地域有力者による事前調整がしばしば見られ、無競争選挙となることも多い。

十月三日 金曜

晴。松本日銀支店長中山氏来飯すると聴き、銀行へ出勤す。午後来飯する筈に付、午後二時出迎へたり。中山氏は各銀行を廻り、伊那社、松尾組合等を視察して、仙安に於て晚餐会あり。三宜亭にて茶を喫したり。此三宜亭にて旭義諦氏に面会す。

十月四日 土曜

晴。午前中組合に行かんとせしが、日銀松本支店長中山氏退飯に付、蕉梧堂を訪問し面会して下伊那に於ける歴史を話せしに大に喜ひ、遂に思想史一部を贈る。砂払迄見送り、中山氏は大平峠越にて午前九時半退飯す。銀行に帰りて事務を見て後、西上柳に千代田生命保険代理店決算社員総会開かれて出席し、計算書を見て承認したり。

午後七時より龍門寺に旭義諦師の講話会あり、出席す。組合の職工全部聴講す。大雄寺和尚の前講ありて後、義諦師の落付ある話あり。

「何が幸福か」と云ふ話ありたり。又白隠の赤児を養育したる話あり。終つて市村、伊沢等と明宗和尚送別会の事を決す。義諦師の世話にて明宗和尚広島龍沢寺^(マヤ)(?)へ法嗣としてもらはれ行くなり。

十月五日 日曜

晴。午前中家居して坐敷を掃除して龍門寺和尚と旭義諦氏来訪すると云ふので待つて居た。午前十時来訪し明宗和尚も同伴し福寿院も来る。茶の接待せり。一行は川施餓鬼に行く。

午後組合に行く。製糸部統一に関する委員会を開き、一工場、二工場区分試験及二工場に關し利害に付調査方を相談す。代田芳郎来訪して予に所得税調査委員たる事を慫慂す。固辞して受けず、遂に彼の為にみどりに行く事を約す。夜に入りてみどりに行く。上飯田町助役今村、鼎林、竜丘代田、川路今村村長及本塩助役居りて予を責め、予の固辞するや父よりの葉書を出して、親公がやれと云ふものを君は如何にするかとの詰問に何と答ふる術もなく、屈従とは思ひつゝも父の命なればもだし難く引受る事とし、代田に頼み一任せり。次で千代に電話をかけ太平の意見を問ひたるに、銀行としては面白くなけれども君の意志に一任し私より彼は申さずとの事なり。因て父を電話にて犀北館に求めしが、洪の宿不明にて、金田の所へ夜中訪問して所得税調査員の事を話し、太平の了解を得て立つことを報す。

予記 所得税調査委員選挙に上飯田、鼎、松尾、竜丘、川路に推されて立つことを止むを得ず諸す。みとりにて会合して飲む。莫迦々々しさ云ふはかりなし。

【語句の説明】犀北館：一八九〇年に開業した西洋風旅館（長野県長野市）。犀川（当時は長野駅の近くを流れていた）の北に所在する

ところから、書家巖谷一六によって「犀北館」と命名される。

十月六日 月曜

晴。朝早く目覚めて床中で調査員の選挙の事から組合の事から連想かそれからそれへと続いた。父か不在なので帰宅を待った。然し父の投けた弾は各村長の頭に轟いて、予を擁立する事は動かなかつた。朝組合支所に行つた。電話で太平と打合した。役場へ行つて低利資金の事を聞き、秋山に会ふて組合本所事務所を貸与する事を話した。

隣の猪佐雄にも会ふて調査員の話をし、予が候補となつた話をした。丸山幸治から黒沢問題の礼があつた。役場では代田に会ふた。代田は熱心に予の立候補運動に骨を折つて種々相談してくれた。

丸形屋から推薦状を届けしめて（推薦状は代田の分と各連合村の二種）、上飯田町の分は銀行から発送した。他の分は各町村毎に事務をしてもらふ事にし、各村へ届けた。吉川医院で太平に会ふて銀行へ出勤した。放課後原田、関島等を使ふて飯田町、上飯田、其他直轄の地へ推薦状を出した。吉川村長は種々用があるからと云ふので、相談には出て来らなかつた。

予記 午後六時から姫城館で明宗和尚の送別会を開いた。伊沢、石原、市村、平栗、瀬川と和尚二人出席した。

十月七日 火曜

晴。組合より役場に行く。其後銀行に行く。組合にては秋蘭挽をやめて春蘭挽の件、青山より相談ありたり。上飯田町は鼎、松尾、竜丘、川路の連盟より脱退して単独行動をとらんと申込、予の推薦状に加名したる事迄も取消を申込来れりと云ふ。斯の如き不信の行為をなして

迄も予の立候補を慫慂したるは不信甚しく、憎むべきなり。五日の夜上飯田助役今村来り、みとりにて予に立候補を慫慂し、若し君立ては此聯盟に分裂なかるべしと申込みなどして置きながら、今更加盟は出来ぬ等言ふは不信も甚し。銀行放課後姫城館にて明宗和尚送別会を開く。来会者石原、瀬川、伊沢、平栗、市村と予の六人なり。父と朝苦茗を啜りつゝ、予の立候補の成行を語りたり。併して身体に寸暇なきものが所得税調査員の如きは御免蒙り度所なりしも、父の命なれば致方なし。

十月八日 水曜

晴。所得税調査員選挙の爲、田中勇太郎をして上飯田を開拓すべく、派遣すべく手紙を田中に書く。田中は上飯、田村、久保田、吉沢等と打合せて運動する筈なり。上飯田より井村豊太郎立候補するせぬ等聴かれたが、結局、高綱某の策動にて辞し、高綱立つと伝へられたが、結局、飯田にダ協なりて井村補欠となり、無競争に終る事となれり。依て別に運動かましき事をせずに静に成行を見る。午前中、組合より役場に行き、本塩助役と打合せて村内のかためを充分してもらふ事とせり。村長の態度は予に対して直接多くを語らず、好意を有するも別に運動はせざるもの、如し。午後、銀行出勤す。組合本所に行きて見れば、事務員昼休みして居れば之を怒りて集会の上注意し、爾今昼休はせざる事に決し、両所に通達せり。

鼎方面牧野を頼みて下山村を運動せしめ、下男を使はして牧野の紹介により有権者を其名刺を持たして廻らしむ。

予記 猪佐雄を呼んで所得調査員選挙の件につき相談して助力をなさしむへくつとめた。彼は此話を聴いて来訪して尽力すべきとある。

受信 北原姉。

十月九日 木曜

晴曇。朝九時、龍門寺より明宗和尚出発するので、見送の爲寺へ行く。伊沢、平栗等居りて山村駅より飯田に出て、飯田駅前にて見送り、自動車にて大平越にて立つ。明宗和尚狂女に恋慕をうけ寺に放火せられたれとも、彼の意志堅固にして身を護りしは数年前の事なり。遂に今回広島県下の龍福寺の旭義諦師の世話にて住職する事となれり。

午前中、銀行出勤し、午後役場に向ふて去る。役場にては狩立の爲、人足一人を頼みて十日の選挙に供へ有権者を訪問せしむ。八幡にて山下福雄と話す。市瀬俊太郎の手廻り居るもの、如し（八幡方面）。役場は失業救済にて共有山株を払下けて製炭せしむべくつとめたる爲、其下相談に組合長として参加せり。製炭補助金は役場より五百円丈出し、株代を半額として製炭希望者をつのりしが、三十五釜程出でたり。組合よりの半分は炭の販売は引受くれども、製炭業者に於て組合を組織し責任者を定めて組合と貸借関係をなすものなり。他の販売はせぬ事、組合の検査に従ふ事等打合せたり。後、青山、江塚と共に八幡劇場に芝居を見物して午後十一時半帰る。

予記 □□委員会開かる。

発信 赤神良讓（青年講習に就）。

社会の今日 共産党合同裁判開かれ、法庭大混乱となる。

【語句の説明】①龍福寺…広島県比婆郡高村小用（現庄原市小用町）にある妙心寺派寺院。

②共産党合同裁判：十月八日に行われた、東京控訴院管内の四・一六事件の公判。裁判では、被告二十四名と傍聴人らが法廷を一時占領

し、審理不能の状態に陥った。

十月十日 金曜

晴。所得調査員選挙の日である。午前八時より正午迄であるので、九時、投票場役場に行く。当村候補者予と補充員関島建吾と并へて机上にあり。猪佐雄と奥村嘉蔵の二人が立会人であった。投票した後、銀行に出勤した。午後、各地よりの選挙の情報が来た。其の連盟村の模様は上記の様であった。金を使はなんだ事、無競争であるので余り一生懸命で選挙をやらなんだ事等が予の票数の少なかった原因であった。呑気な選挙であった。飯田町では選挙事務所を張つて酒飯を出したと云ふ。飯田町の少なかった事や他の村へ推薦状だけでは何の役にも立たない事等を知つた。野原文四郎と打合せて種々の方面の情報を聞いた。頭取大平は心配して各方面への電話で予の為に推薦をしてくれた。行員の上郷、吉川は北部連盟の手前、予に投票は出来なかつたと話した。

予記 松尾 四三の内、森本二八、市瀬四、沢柳一、島岡一。
鼎五、上飯田五、川路一三。

十月十一日 土曜

晴。丸岡屋が来て、八ヶ島肩の蛇籠の築造工事に付て父と打合せた。工事は竣工した。午前中、組合より役場に行き、本塩と選挙後の打合を如何にすべきかに付相談した。代田市郎と話せと云ふので代田に電話をかけたが不在であった。吉川へも十六日ミドリに来てくれと頼んだ。それから銀行へ出かけた。まあ最後ではないが、尻から二番目で当選したらしい。聯合事務所に下田及原と教育勸語発布四十週年記念

日を作興会として如何にすべきかに付相談し、又北原会長にも相談したか決せなかつた。中原とも話合つたか決せなかつた(電話で)。放課後、北原姉を訪問して大平の娘を嫁にもらい度いと申込を(金田を経て)駄目であつたと奉「報」告して置いた。夜に入つて帰つた。庭鎌か来て垣を造ることとした。

十月十二日 日曜

晴。朝、弁天堤防へ秋草を取りに行き、花瓶に投ず。梅蔓ありて実黄にて見事なり。マユミ等も紅葉せるあり。前島貫一來訪して南信新聞社寄附金(父百、予五〇)を集めに来る序を以て、***整理問題に付父より彼に種々依頼せり。「中略」午後、組合より迎のもの来りて本所へ行く。青山居りて諸事打合せ、今晚の工賃減額及セリプレーン表彰の件等話し、田中句一郎も来りて不況の話等せり。低利資金拾万円程申込置くべく命せり。青山も予に是非組合に居りて事務を見てくれと頼まれたり。

金田より電話にて銀行野球チーム優勝したれば是非明日の試合に出してくれと云ふ。現下の野球は享樂なり。此一般農村不況に際して行員か野球の享樂に耽るは何たる事ぞ。新興青年は享樂を捨て、勤勞するの風を興さざるべからず。然るに野球の享樂に耽るとは何事ぞ。不賛成なりと答ふ。

龍門寺に無尽あり、出席す。講は届出て継続する事とす。

十月十三日 月曜

晴。午前中銀行へ出勤し、午後組合へ来る。八幡境内にて吉川芳太郎に面会し、大沢国弥解雇に付き、彼に話し方を依頼せり。本所にて

賄方三浦を解雇方申渡す。龍門寺和尚を訪問し、布教伝道講出願書類に捺印して警察に届出つ。

予記 布教伝道講世話人として届出。

十月十四日 火曜

晴。朝、銀行出勤す。午後一時より聯合事務所に北原、掛川と予と会合して、教育勅語発布記念四十周年に付、作興会として何か為すべき事に付き協議せしも、何も名案なく予算もなければ、致方なく次回迄に研究し置く事とし、世態悪化と下伊那人士の此大反逆罪に対する神系〔経〕マ〔麻〕靡しつゝ、あることを慨し、思想傾向に付話し合ひたり。中原、本学神社祭にて来らず。松本聯隊区司令部へ注文して出来上りたる下伊那思想史出来上り披見せり。銀行頭取上伊那地方出張せり。

庭鎌大工来り垣を作る。

八ヶ島堤へ竹を殖へしむ。

発信 松沢源治、ミトリへ招く。

十月十五日 水曜

晴。中原と約して滝沢清顕を訪問する。午前八時、中原来訪し、共に携へて滝沢を訪ふ。実行会は作興会と共同して教勅四十周年講演会を開く事、若し其筋より講師を派遣しければ其れを以てし、若し然らずとせば単独にて講師を頼み（作興会と）講演会を催す事とす。其費用は若干宛寄附による。作興会講演後、実行会の総会を開き、実行会の今後の方針等打合せこと等を約し、三原屋へ貸付ある実行会資金に付ても困つた話ありたり。

正午滝沢を辞して毛賀より乗車、飯田へ銀行出勤す。下田へ電話にて県庁原へ頼みて講師派遣方を依頼せしむ。放課後、原田を頼みて所得税調査員選挙当選礼状を出す。其数二百三十枚なり。連盟村、上飯田、鼎、松尾、竜丘、川路の各村へ出したり。

庭鎌及大工丑六を招きて坐敷垣を作らしむ。

発信 蜂谷勲、牧野貫治、久保田栄次郎、選挙礼。

社会の今日 不景気を唱ふ声となり人心悪化す。

十月十六日 木曜

晴。組合支所にて代田三五郎を招きて解雇する旨を宣す。木下六郎にも大沢国弥雇を解きたれば其の後を襲いて仕事すべき旨を通告せり。今日より口挽を開始す。午後一時、銀行に出勤すれば、日銀松本支店員吉村某来訪し面会せり。午後三時よりミドリに於て所得調査員選挙に際して労を慰すべく宴を張り、吉川、本塩、林、清水、代田の五名を招きたり。夜十時過迄盛宴を張る。三新聞に当選礼の公告を出したり。他人は一新聞五円位を出したる由なりしも、予は二円宛としたり。役場に製炭講習ありたるも予は出席せず。

十月十七日 金曜

晴。組合支所にて小木曾を雇入する事を話し、又木下六郎をして大沢の跡を事務を引継かしむ。口挽中を視察して後、伊那社に役員会あり出向す。午前十時より初まる。役員会の問題は蚕糸中央会に組合製糸部を認めた事、其他に付協議し、職工工賃も一切に夏挽中五十銭、最低廿五銭を申合せ、組合製糸協会に就ては予は特に協会と下伊那に於ける組合との意志疎通を欠くを以て、此際意志の疎通を計り、組合

の意志をまとめて今後協会に臨む事、新規蚕種研究会の如きは下伊那としては要なきを以て、之には反対の旨を通告せしむる事としたり。

午後引続き代表者会ある由なりしも、欠席して帰る。帰宅して労を慰すべく就床せり。山本条太郎著日本経済論と里見岸雄著の教育勅語解説を読む。引込み思案のみ多くなりたり。大工丑六、庭鎌来りて庭の垣を作る。

下男久雄、山本、消防に行きて帰る。

村の女子会あり。増恵出席す。

社会の今日 飯田に県下消防大会あり。夜会あり。煙火等沢山出る。

【語句の説明】①蚕糸中央会：蚕糸同業組合中央会。一九一五年三月、

農商務省が開催した蚕糸業諮問会にて発足が決まり、四月に認可。

②山本条太郎著日本経済論：山本条太郎著『経済国策の提唱国民繁栄への道』（日本評論社、一九三〇年）を指す。

③里見岸雄著の教育勅語解説：里見岸雄著『思想的風を突破して教育勅語徹底解説』（アルス、一九三〇年）を指す。

十月十八日 土曜

晴。四方の山々か紅葉を初めた。庭前のドウダンも紅葉を初めた。組合支所へ出勤した。江塚から道路の話があつて中島勘一か来て組合の敷地の内、道路になる分を割譲する話をした。案は二つあつて一つは包み金で組合に一任する事、之に対しては組合は前に年貢を下げぬ事、一つは潰地を測量して其分に対する金を渡す、然らば組合は年貢を差引きて与へると云ふ事であつたが、中島は後者をとつた。

農会の玉糸講習があつて支所で始める事とした。発会式に臨んで一場の挨拶をした。終つて上柳の土地買入に関する登記洩分九坪に対し

て交渉をする事として上飯した。原貞次郎と作興会にて教勅四十週年事業に関して打合をした。県の模様を聞いて原か銀行へ来たので、今回県へ交渉を頼み、且又、県議等が銀行樓上へ集まつたので（太平主催）吉川県議にも頼んだ（十九日出県するので）父は川路、安藤耕斎を訪問した。

庭の垣根を作つた。隠居前のものは無くもかなであつたが、父は造る事を主張し、父の思ふか俣に任した。

【語句の説明】①ドウダン：ドウダンツツジ（灯台躑躅・満天星）。

②玉糸：玉繭（二匹の蚕が一緒に作つた繭。普通の繭のような中央のくびれがなく大形）から紡ぎ出した糸。主に節糸織または銘仙織に用いる。下伊那では、玉糸は家内製糸として行われていたが、日清戦後から玉糸を主とする製糸場が増えた。

③安藤耕斎：長野県出身の日本画家（一八六二～一九三九）。

十月十九日 日曜

晴。組合へ朝より出張す。大沢国弥、代田三五郎、三浦幸一の三名を退場せしむ。金福寿は青山をして之に当らしむ。終日、組合に居て組合の状況を見れば、悠々閑々たるものなり。銀行の如き活きた商売と異り閑日月多し。併し一般の不況は甚しく、其恢復には如何にすべきかに付ては甚だ困難なる問題なり。農山漁村救済の七千万円申込に付、組合より五百万円申込みたるも、此の保証に付ては村長も難とし、県知事も亦難事とする所にて、実に迷ひ居るもの、如し。

鹿太郎来り。勝の無尽を如何すべきか相談ありたり。***借金多く家政整理をなさんとし、談之に及ひたれば来る様話したり。

十月二十日 月曜

雨。組合支所で工場を見て専務より原料「ツヤ消」を以て最優の糸をとらんと決したる由に付、工場一般に放課後話する事も協定して上飯す。銀行へは午後一時着して、頭取出行し居り、本店検査を行ふべき旨を協議す。経済界不良甚しく、行務閑散なり。信産銀行は橋爪、黒沢等の問題にて担保の追徴其他の嚴談により彼等を潰したる事により、一層の誹難をうけたり。当行は遅れたりと雖も、問題大なれば余りに声を大ならしめず、信産銀行の評判殊に悪し、沢村屋、加藤等の不評も亦伝はる。

中原と相談して猶興社の幹部会を廿四日午後三時聯合事務所にて開く旨、塩沢、今村、吉野等に通報す。午後六時、組合支所に於て工女を集めて原料ツヤ消を以て最優糸を操糸すべき様、激励演舌を試みたり。

十月二十一日 火曜

雨曇。銀行へ出勤す。午前中行務を見て、原貞次郎へ電話にて県学務部へ教勅週間に講師派遣方を是非飯田へも願ひ度旨、公文を以て申込むべく命す。本晚より大島に於て小飼師の作興活動を初むべく、下田より話あり。下田を出張せしむべく命す。午後零時より組合に於て原料ツヤ消を以て八十七八点の生糸を製造すべく、一場の口演の激励を工女を集めて話す。専務第一線をやり、次に井深、次に予が出て、激励の演舌をなす。其要旨は、本組合の糸が他に比して粗悪となりたる事、製糸に必要なものは一、原料、二、施設、三、法方、四、協同一致、五、技術なり。此の内、原料、施設、法方共に満点なり。協同一致と技能か之に伴へは、必ずや八十七八点以上の糸を得べし。若

し出来ずとすれば退場の外致方なかるべし、若し又出来たならば一部分を賞として分配すべしと説けり。

朝、***来訪し、家政整理に付、其の貸借の調を持来るべく命。組合より八幡支店に行きて片桐、吉川と共に調査す。

社会の今日 国民の意氣阻衰し、倫敦条約にも間島邦人殺害にも外交上に於ては何の弾力性なし。会は之を不服とするも施すの術なし。

十月二十二日 水曜

晴。庭前の紅葉正によし。六分の紅葉をなす。朝八時組合支所へ行く時に長野より実業補習教員養成所より生徒三十名計りを引率して来所し居る菅原兵治に会ふ。彼は金鶏学院安岡先生の門に学び、金鶏報によりて時々名を知るの人、初対面す。安岡氏の人物を髣髴せしむる其の態度、言行、招して応接間に生徒を集め、組合か現になしつ、ある事に付説明し、現下の産業組合は道德と経済とを如何にして調和すべきかの機関である、此点に付苦心の存する所を話せり。終つて後小学校に伴ひ彼と金鶏学院の事を話し百年の知己の如くし、江塚正より農工株二株を一株廿三円廿五銭にて買受く。後出行す。本店検査を励行す。原貞治郎に教勅講師派遣方県へ頼む。行員の野球優勝につき其費用の寄附をうく。其の野球は既に予が反対したる処今更之れか旅費等の寄附を強制せらるゝ、は行員の心事面白からず。

宅より電話あり、鳥山武次郎米より帰朝し来訪したれば直に帰れとの事に魚、ブドウ等買ひて帰る。鳥山其倅賢蔵の嫁を伴ひて来り一泊す。

発信 滝沢清顕。信也。

社会の今日 明年度予算編成難。収入不足一億五千万と云ふ。

【語句の説明】金鶏学院：一九二六年、設立。酒井忠正伯爵を院長とし、安岡正篤が学監を務め、幹事に後藤文夫、結城豊太郎、松本学、赤池濃などがいた。機関紙『金鶏会報』を発行。一九二二年から安岡は酒井邸内の金鶏園で孔子を講じていた。精神教育に重点を置き、政財界のみならず、軍部からも支持者が多かった。

十月二十三日 木曜

晴。鳥山武次郎滞留し母及増恵同伴して天竜峡探勝に行く。
朝組合支所へ行きて見るにセリプレーン成績最も優秀にして平均九十点位のもの出来たり。職工をしめ上げて督令したる成績見るべし。
口挽の状況を見て後玉蘭夏秋受入分商談成立し生貫一貫目に付一円二十錢にて売却の約成る。上飯、銀行出勤す。午後三時より重役会を開きて一般営業状況を物語る。終つて仙寿楼に夕食会を開き出席す。尚清和会開かれ酒宴に出て、後帰宅。勇一株を買ひ入れて帰る。父金婚の宴に付考察しつゝあり。

庭前の垣を造る。

父の金婚式に当り増恵と予とにて真綿ふとん父母に一枚宛祝ひとして呈する事とす。

受信 徳富猪一郎。明宗。吉村政美。

十月二十四日 金曜

曇。底寒き日なり。組合支所を経て銀行出勤す。銀行にては検査を執行す。午後三時より聯合事務所に猶興社幹部会を開く。会するもの吉野、塩沢、今村の三人と予と中原なり。直に席を児島に移して左の件を協議す。猶興社に予と中原が表面に立つや否や。此の件は、予と

中原は曰く、我等は既に既成政党の色彩あれば、却つて社の為に諸君が進出して吾等は背後より進む方可ならんと思ふ。之に対して他の三者は是非此際両君が出でざれば駄目だと主張す。然らば誰と云はす吾等五人が名を出して進むべしと決し、次に大会は赤神氏来郡の時開くべし。社の拡大運動としては自ら二三人のものを加入せしむべし。徒に多数を頼むべからず。健全なるものを選へは足ると云ふ主義を持つ事。政治的のみの団隊でなく経済的には社界のあらゆる方面を講究するのが我等の社の目的である故に、政治のみを以て目的とすべからずと論したり（吉野は政治論者）。

予記 猶興社にて勤労党の話をなせり。松島薫の所へ立寄り茶を呑みて帰る。

【語句の説明】猶興社：一九二九年十二月、森本州平、中原謹司らが結成。森本・中原らの地域有力者を指導者に、青年層に一定の基盤をもつ。一九三二年、猶興社を母体に、愛国勤労党南信支部が誕生。

十月二十五日 土曜

曇。朝組合に行かんとすれは**雄来訪せり。父と整理に付話せり。組合にては工場其他時に催せる農会真綿講習等を見て午後一時上飯し引続き検査を行ふ。頭取中島竹三の件につき愛知方面に出向して帰らず。金田の所へ所得税調査員選挙に際して深更訪問し、世話になりたれば返礼として羊羹一円を買ひて届け置き。右脚の股神系（経）痛にて歩行意の俶ならず。老年のせいかとも思はれたるも、併も之れ位の事にてはヘコタレてはよろしからずと思ひ我慢して歩行すれども痛みは去らず、立居振舞上支障あり。

「原理日本」の井上清純大佐の倫敦条約に関する憂国的論文を読

む。純忠の言思はず襟を正さしむ。

十月二十六日 日曜

曇晴。終日家居す。父が一生一代の金婚式をするから此際は銀行も組合も休みて手伝をせよと云はれ、止むなく組合へも行かず坐敷の掃除より敷物を倉より出して敷き、額をかけ代〔替〕等して午前中費ゆ。午後に至れば峯太郎来りて松を生け坐敷を裝飾す。朝、鹿太郎、友治来り、勝一の無尽に付届出の話を泰治、又一、道之助等としたれども、責任のかぶり来らん事を恐れて承認せされは如何にすべきかと云ひ来れり。予は此際世話人は責任を免れる事は出来ないから、無尽法か改正せられたりとも此際世話人は加判して届出をなすより外致方なからん。喜代を遣はすべしと命したり。併して届出する様なさしむ。

久男と庭鎌にて松の古葉を払ひ、庭木の手入をなすを見る。スガラ松に來りたるをつけたり。此の如くして終日父金婚式祝の手伝に終る。夜に入りて***を呼びよせ、彼の借金無尽を除く二千八百円あり、之に対して田地五反八畝十歩あり、之か整理に付て整理案を考へてやりたり。

予記 右脚の股神系〔経〕痛起る。

社会の今日 大観艦式、神戸沖に開かる。

十月二十七日 月曜

晴。組合支所に行き事務を見る。午後一時より役場で村会あり、沖島村有地貸の件及水神橋起工式等の協議ある筈なりしも欠席す。飛行場貸は賛成すれども水防組合等の承認を経置くを要す。

午後二時上飯、銀行出勤す。放課後商工会議所龍江を訪問して、野

原氏を名古屋税務監督局協議員に推薦すべく話す。後野原を訪問して父の金婚式の招待と税務協議員の話をしたるに、野原曰く北信の方調査員多数にて上田、長野、松本の三市常に聯合して選挙し居れば、此際到底上下伊那の聯合にては駄目なるべしとて受付けず、島岡三蔵にでも此話ありたる由聞及ひたるも勝算なければ致方なしとして遂談終り、帰宅す。朝、太次郎来訪し、青山へ話し送りたる結果の報告あり。夜又辰弥、鹿太郎の兩人、太次郎地所マカナイの件につき来訪したれば、整理案を大体を示して砂余留畑七畝二十四歩を一枚買ふ事にして帰す。

十月二十八日 火曜

晴雨。組合支所、本所へ行きて事務を見る。長野県産組大会長野に催され、吉川順治郎と共に出張する事に打合をなす。午前中本所に居りて小池龍水社技師の来訪をうけ、蚕品種に付て説明し、今回繰糸しつ、あるツヤケシ種類に付説明してやりたり。午後上飯し銀行出勤す。東日青柳記者より蘇峯先生欧州行の記事出てたる事を報し来る。片桐と本店検査を行ふ。午後六時組合支所に於て口挽終了式あり、慰労の為酒を支給し其席に列して帰宅。

義勝来訪し、父の金婚式祝の献立作製に参加す。父は金婚式に就し種々心をくだきて意匠等考へ居たり。作興会映画近村各地に催す。原貞治郎来行し県へ教勅の講演講師を頼みたる顛末に付報告をきく。県にては好意を有するも費用の關係にて六ヶ敷模様なり。松尾青年会女子会表彰をうけたる由聞及ふ。

十月二十九日 水曜

晴。***が来訪して其家政整理につき相談をうけた。組合へ行つた。売却土地の状況を地図に付調べた。銀行へ出勤す。頭取県会議員として出張不在なり。検査を行ふた。青年訓練所功労者として中原、大沢茂尾女史表彰せられた事を聞く。

教育勅語発布せられ四十年になり、教勅は単に式に於て誦むものであると云ふ様な固定的のものとなつた。社界一般は益々下落し、人道情義は没せられて頭官紳士と云はれたものにも反罪者が出るもの多く、小橋一太前文部大臣の如きも刑務の人となるに至つた。村田大平氏から講演部長寺井氏か上伊那へ来ると聞いた。

受信 村田大平。

社会の今日 台湾霧社の蕃族蜂起、邦人を殺す。

十月三十日 木曜

曇。父か終世の宴会をする金婚式は数年前より目論まれた。幸、本日は教育勅語煥發四十週年に相当する。午前九時より小学校に於て記念式か挙行せられ参列した。組合に立寄て直に帰宅して父の祝儀を手伝ふた。此金婚式には時節柄、宴会等は止めた方がよい、但し近親の者だけ招いて極質素に内祝すべきであると父を諫めても見た。併し父は己の一生の祝たと云ふので、予の諫言も少し容れて招待は極限してくれた。道具を出し、坐敷を飾り、庭の掃除を下男と庭鎌とにて一生懸命さした。午後四時から内祝の宴を張り、記念の写真をとつた。鹿太郎と焼酎屋を招いて給仕をせしめた。坐敷へ膳を並べて宴を開いた。家族のものに扇子を与へた。予夫妻は金婚御祝として増恵と二人で蒲団二枚を父母に呈した。家内和氣藹々裡に宴か終つて道具の始末を終へた。衡平を招いて客とした。電話で金田から北原源三郎の娘を下平

一郎氏の次男から結婚約の申込かあつた。

予記 夜に入りて大暴風雨、稍ハザか倒れた。庭は松の葉で埋れた。銀行欠勤した。宮坂競宗師来村演講ある由も聞いた。

十月三十一日 金曜

雨、暴風雨。夜来暴風となり松の木を鳴らして夢醒めたり。前夜より教育勅語四十週年に当るので拝誦して寝についたが、暴風の為に眠につく事か出来ず、「日本」をとり出して山川先生の謹話を拝誦す。朝松の葉庭に散りしきたり。組合支所に行く。青山と役員会に付相談す。午後銀行出勤す。

「祖国」「原理日本」「国本」等雑誌来着すれとも読了するを得ず。竜丘村二木秋作氏葬式ある由を金田より聞く。会葬出来ず。電話にて新作を呼び出し上飯を促す。午後五時、虎四郎、小衣（松尾政臣の娘）も亦来行し携へて仙安に至り夕食を供す。兄弟久し振りにて相会し話せり。座光寺の娘の縁談に付ても姉に話す（下村一郎次男正弘より申込）。

午後八時帰宅せり。父金婚式の仕度万端整ひ居れり。敏及牧内伯母来る。

十一月一日 土曜

晴曇。父母の金婚式当日である。朝早くから掃除をした。前日の暴風雨で松の葉が山の様に落ちたので、庭鎌や喜代が掃除に余念がなかつた。客は午前十一時始まる都合であつたか、来客の中、弼や山本の兄や文四郎等は正確に来たが、村田屋連中が遅いので漸く午後一時半に着す。午後二時から膳が出る。記念の銀盃、菓重の一つには和泉社

の曲玉の紅白二顆に松葉を入れ、他の一重には七つ盛を入れた金婚の金字を冠したものを盛った。坐敷は父が種々様々に飾り立てた。倭志雄、操等から祝詞が出た。桑原宗古翁よりも祝歌を寄せられた。客は十三名で午後五時閉宴となった。

作興会の映画が軍人会主催で開かれたので出席した。小飼氏に会ふた。小飼師は龍門寺に一泊を頼んだ。夜十一時分れて帰った。軍人分會では慰労の宴を張つてくれた。父も今年は齡七十に達し古稀であるので写真を配った。豊饒たる身体には感謝せざるを得ぬ。

予記 松尾青年會及処女會同時に表彰せらる。

十一月二日 日曜

雨曇晴。父金婚の祝宴を兼ねて紅葉の觀楓をなす。午後一時に招待したるもの来る。午前中弼居残りて手伝せり。招待者吉川芳太郎、大平重太郎、丘山和尚、安藤耕斎、本塩義治（亮夫、木下宗義、太田操太郎、山本父は不参なり）。義勝の料理にて午後六時迄宴を張る。一般農村疲弊の極に達し居る際なれば、父に遠慮する様云ひしも聞き容れず催したるは面白からず。家内中数日来此れに忙殺せられたり。

信也の所へ父の賀の菓子を郵送す。全家父母の祝に没頭せり。

康野より緋鯉三、黒鯉十、其他四尾、山口英太郎別荘へ届けたる旨話ありたり。

予記 大日本農會、青年會館に開かれ、農村を疲弊より救への声満ちたり。

社会の今日 台湾生蕃叛乱し、多数の内地人殺さる。帝国農會開かれ大混乱す。青年訓練所等御親閲表彰あり。

十一月三日 月曜

曇晴。午前中耕斎氏泊り、其応接をなす。揮毫をなすを見る。

午後一時より支所に於て組合役員會をなし、種々報告をなしたる後、事務員従業員の減俸に付協議す。此問題に付ては専務他の理事と窃に打合をなし、二割の減俸を予め打合せ置きたるもの、如くなるに付、役員會の初まる前に當りて専務に執行役員よりかゝる問題を付議するは隱当ならず、執行役員は事務員擁護に立つべきを述べたり。役員會に臨めば果して他の役員は二割減俸を主張し、予は之に對して孤軍奮闘して一割五分を主張したるも容るゝ処とならず。然らば十二月分より行はんと決して散す。青山に、此の如き問題は予め他の役員と相談する前、予に話して了解を得べし、然らざれば大なる困難に陥るべしと告げたり。

帰宅して見れば、金婚式の慰勞會なりとて餅をつき、一般の不況生活困難の模様は知らさるもの、如し。因て父に一般農家の生活困難なる状を述へ更に他にも話したるに、父却て反省せずして氣に障りたるもの、如し。

社会の今日 青年、御親閲あり。

十一月四日 火曜

晴曇。組合支所本所に行く。木下房吉と決算事務に就て話す。又減俸の余義なきに至るべしと告げたり。下田史郎より電話来り、小飼氏映画の為、大鹿青年より申込に應じて、出張すべきや否やを問合せ来る。午前十一時半聯合事務所に行きて下田に會いて、大鹿へ電話にて映画すべきや否やに付、打合せたり。猶、北原一郎に會いて、産業組合として三四月の候は資金難に陥る恐あり、因て部會としては如何に

処置すべきかを相談し、且又付近産組の事務員の減俸問題に付如何になし居るやを調査せしめたり。後銀行に出勤す。大平頭取、県参事より帰り、出勤す。放課後、小飼氏の映画慰労会を催し、旅館柴田にて下田と其労を犒ふ。大鹿村は赤化青年の魔多き所なれば、作興会映画を催す事とせり。

中原を訪問し表彰御受けの模様を聞き、夜九時帰宅す。

熊谷龍崖来訪し泊る。宮沢敏帰る。

吉村政美氏より白隠画写真送り来る

発信 山口英五郎。

十一月五日 水曜〔記述なし〕

十一月六日 木曜

晴。午前四時出発吉川順治郎と共に本県産業組合大会に出席す。下久堅竜丘等の組合も亦同行せり。正午着、直に野産組大会に出席す。会は城山館に開かる。協議問題は財界不況対策にて議論百出「其筋に要望する」と云ふ事に対して、総理大臣は吾等の大番頭なり等の論も出でたり。大会は定められたる筋書を議論して、弁当を食して帰るものなり。有馬伯爵の講演あり。政治を論じ投票権に及び、地方有権者が党派心を以て政綱に不注意なるを戒めたる俳ギャクを交えたる話なりし。

寸暇を利用して県庁に視学山口氏を訪問し面会して教勅四十週年に際し講師派遣方を懇請して、紀平博士来松するに付、其途次を以て来飯を促して其諾を得たり。農商課に太田水産技師を訪問し天竜水電と工事の関係を問合せて、再び大会に出席したり。午後三時退出して真

島組合を見んとせしも果さず。松本浅間湯小柳に投して泊す。片桐組合製糸鶴岡、大島氏も同泊せり。

予記 大会に於ては不況対策講ずるものは一つは下向し組合員の生計を緊縮する事。一つは上向して其筋に要望すの二つあるのみなりしも、予は窃に思ふ。此際農民の生活は切りつめに切りつめて余地なし。官吏にして組合に携はるものは共存共栄の意味より先づ其板給を半減し範を民に垂るべし。

【語句説明】①有馬伯爵：有馬頼寧（一八八四～一九五七）。旧久留米藩主有馬頼万伯爵の長男。産業組合の要職を歴任、当時は貴族院議員。②紀平博士：紀平正美（一八七四～一九四九）。国体についての著作の多い哲学者。学習院大学教授。

十一月七日 金曜

晴。浅間小柳に一泊し、朝中央山脈の雪を見る。雄大なる風景快し。

朝八時半宿を出て駅付近の普及社工場を訪問し、刺を通して来観の由を述ふ。雇人のみにて案内するものも雇人のみなり。之を統轄すべき様の人物も見えず。冷凍干燥を見学せり。工場の方は乱雑にして整頓せず。何の見るべきものなし。出て、自動車にて村井駅前共栄社工場を訪問し新設の工場を見る。③製糸鶴岡、大島両氏も同伴す。共栄社工場は最新の設備にして規模大に四百釜あり。幸昼食時なり。招せられて昼食を供せられ、工場を一巡して其整然たる事、良糸は整正より生ずるの原理の詐らざる事を知る。四百釜の工場にして九千坪の敷地の有するなり。駅前の店にてリングを土産として買ひて帰る。電車中秦少将に刺を通して、吾々同志の思想問題に付、思想国賊を征伐し

つ、ある事等話を話して、電車中の二時間を話して飯田に来る。青野少佐も亦同車して刺を通し話せり。部奈恭一南米へ旅行する由を本人より聞く。

蕉梧堂に秦少将を訪問して太陽道を聞く。知音直に吾同志なる事を知る。少将は夕刻迄開かれたる聯合分会長会に列席す。

社会の今日 台湾生蕃反す。

【語句説明】①共栄社：中信地方を中心に展開した組合製糸の一つ。

②秦少将：秦真次（一八七九—一九五〇）。一九三〇年八月、第十四師団（宇都宮）司令部付となる。

十一月八日 土曜

曇晴。今村峯太郎婆死亡し組合寄り集まつて葬式の相談す。組合支所行き午前中事務を見る。午後上飯銀行出勤す。此日鼎村を挟んで青年訓練所秋期演習あり。秦少将来飯して統管す。松本歩兵一中隊来り合同演習を行ふ。夜仙寿楼に宴会あり、出席す。

後旅館蕉梧堂へ来り秦少将を囲んで青野少佐、副官等と会談し国事を談す。秦少将も大川、安岡、綾川、北等と親交あり。国を憂ふるの志士の一連の脈絡あるを思ひ喜にたえず。

一旦緩急の日相携へて立つを約す。言揚すべからざる事を言揚したり。秦將軍云く、一度国の傾くを見るや直に立つべし、其れ迄に吾々同志は、上皇室の御了解を経置きてイサ事ある時は日本の国を日本の姿に速に改めねはならんと語つた。而して其時は今年年の間に迫つて居る。快談数刻にして十一時辞去して外に出て、町の中を中原と共に国事を話した愉快さを語り合ふて、自動車で十一時半帰つた。同志は各所に連絡をとつて居る。国を興すの日は迫つて来る。

社会の今日 親不知にて汽車脱線落つ。難予算出来るらし。

十一月九日 日曜

雨。今村峯太郎の葬式にて終日見舞に行きて帳場を引受けやりたり。朝、鹿太郎来り。太次郎の田地を引うけ処分してくれと申込む。坪当り何程にて引受けくれるかとの問に對して、二円半なるべしと云ひやりたり。近來小作人思想悪化し小作権を云々し自由に処分せしめず之に反して年貢は不納多く、納むるも悪質の米を収むるのみなれば、土地に投資するものなく、公租は土地のみにかゝり来るに付、自作の土地ならばとに角、小作の土地を買ふものは少しと付加へたり。併し救済の意味にて二円半位ならば引受けてやるべしと答へたり。太次郎借金三千円出来て之を整理せんとすれども、田地安くして如何ともし難し。

葬式は午後二時に家の内にて式を行ひたり。忌明の砂振をもらい、夕食を喫して後、雨の中を第一工場の県工場課健康保険監習活動写真に向向す。悲劇的の場面のみ多かりしか、映画と説明よく出来、衛生思想と慰安を兼ねたり。

社会の今日 米国上院民主二一六、共和二一八。

十一月十日 月曜

曇。雨止みたれとも湿潤なる秋日和なり。組合支所を訪れて、専務江塚共に未だ帰組せざるを見たるも、今日は午後一時より工場委員会を開く予定なれば直に上飯す。近來頭腦明晰を欠き総ての事項徹底を欠き、単空々としたる調子にて仕事をなす。確乎たる信念と言動により仕事出来ず。転々として心に浮へる事も移り真剣に没頭する事出

来さる様になりたり。新聞等を読めども矇矓たるのみなり。

銀行業に於ても基礎的の仕事も出来ず、万事其日／＼によりて浮きたる稼きをするか如し。但し日本国民性の墮落と世の状勢の亡国的の傾向のみはマザ／＼と心の裡に明に影ず。仁科一郎の母死亡の公告を見て弔電打す。下伊那青年の赤化記事日本新聞に出て居れば之が参考にもと思ひて、綾川氏迄「局地に於ける赤化問題」を送りたり。午後一時半銀行を辞して組合へ来り、田中、金井、佐々木を集めて製糸部研究会を催す。其結果、本年正月井深をして調査せしめたる工場を二ヶ所に有するに付、其の利害調査を説明し、其結果第一、第二両工場に於ては水は糸量に左程の影響なし。故に浅張は行はすして、製糸業の合理化上工場は統一する氣運を醸成する事に理事はつとむる事に決したり。増恵、牧内行。

十一月十一日 火曜

曇小雨晴。塩沢治雄朝来訪して面会す。談は松島泰雄が不身持につき訓練所に於ても困り青年会に於ても同様なり、依て彼を訓戒して将来彼の為に暫く退いて後の事を計れ、其心持にて居られたしとの話ありたり。

後組合支所より本所へ行く。理事会決議録には決議事項と変したる事務員給料十二月より減額あるも、十一月としてあり、之を訂正せり。青山、江塚、田中三者が常に策謀しつ、あるを見る。午後銀行へ出勤す。近藤代次郎を呼び寄せて松島泰雄の親戚なる故、彼が不身持を彼より忠告せしめ、結婚問題を解決すべき事を、彼を通して松島の家庭へ忠告せしむる事とせり。増恵牧内より帰る。

十一月十二日 水曜

小雪、曇晴。寒氣襲来し曇天にて風強く雪霰の如く来る。朝、湯沢隆三来訪し父の金婚を祝ひ来る。之と面接し居れば飯島操、宮下三郎の兩人自動車にて乗込み来り、三郎の保証ある宮*武*の財産仮差押をなしたる件につきて話あり。之に付ては三郎氏の責任と銀行へ弁護士を向け、話に来りたる点につきて銀行も財産隠ペイにあらずやと断し、余の命も俟たずして仮差押に出てたるものなる事を説明せり。依て銀行に出勤して猶詳細なる話せんと全伴して出づ。銀行へ両者を連れ込み、午前中金田支配人を相手として此件につき具体的解決策を講ず。

午後二時伊那社に組合長会議ありて退出せり。伊那社組合長会議に於ては明年三月操業休止につきては清水氏よりも説明ありしが、満場反対にて遂に起草委員十名の一人となり、余は遂に其反対文の起草者となり、起草して之を組合製糸大会の臨時総会に呈出する事とせり。

沢柳の發議により仙安に所得税調査委員の内、一瀬、沢柳、野原と予の四人集まりて審査委員選挙に關して話合せ、上伊那訪諫方面と連絡をとる事とせり。夜飯田劇場に明治会の舞踊を見、且又田中芳谷氏の説を聞く。日本が東西文化の中心となり廿世紀後半の文化を創出すると云ふ点、皇室の英国皇室化反対等は同感なり。

【語句の説明】田中芳谷：国柱会・田中智学の長男。

十一月十三日 木曜

晴。風越山頂へ雪来り。霜深く来襲し桑葉落つ。庭前紅葉今盛を過ぐ。組合の事夢に多し。銀行に立たんが組合を負ふて進まんか。組合に出勤す。青山、江塚横浜へ出向して生糸を売り来る。八十七点出で

たるも僅に百六十円高に過ず。名目高けれども實質に全しき高点の生糸の売買を実験す。但し生糸の最優等なるものは八十五点位なるべし。出浜及群馬県下組合製糸の状況に就て報告あり。器械操糸の増沢商店の製作にかゝるもの等を視察する事とす。午前中組合にて吉川會計來組したれば田中句一郎も來り、伊那社に於ける蚕品種研究の話も聞き午後天竜峽に於ける漁業組合へ出席する筈なれば遂に銀行出勤を休む。午後二時、江塚と共に天竜峽へ行く。漁業組合は対電委員会あり。三信鐵道のサブリ場防害の件に付、補償金請求の成行に付話あり。金二万二千円を請求せりと事なり。次て天竜水電発電工事に關する大問題起り、俱に田中組長の悠然として延引解決につとめざるを詰り、此際立て不眠不休働くを警告したり。又町村長会と絶縁したる件につきても之を詰問し之か復旧を促したり。

受信 中谷武世。

社会の今日 小川元鉄相の公判愈々始まる。延期となる。

【語句の説明】①増沢商店：増沢亀之助（一八五九—一九三九）が一八九六年に創業した製糸器械製作所。一九三〇年、多条繰糸機として立繰式半沈一二条繰糸機械、翌年には二〇条繰糸機械を完成させた。

②サブリ場：サブリ網（生糸で作られた網を二本の竿に張り、竿本を束ねて水中に投出する形で使われた）を使う漁場のことか。

③天竜水電：天竜川電力株式会社のことか。一九二六年、大同電力の傍系会社として設立。当時、同社は天竜川口にダムを建設する計画を持っており、そのための立入測量及び検査の許可を一九三〇年十一月十一日に県知事へ申請していた。

十一月十四日 金曜

晴。農学校に運動場落成及十週年（開校）記念式あり、招待せられて出席す。組合支所に至りて井深より現業員会の事項を聴取して後農学校の式に参列す。以前に芝原校長の勧誘に應じて金五十円を寄附したる事もあれば招待せられたるなり。展覧会もあり。農業資料及墨跡等もありたり。阪本夫山、一茶、良寛等のもの等も見え、地方先輩の書画等も見へたり。午後二時上飯して銀行出勤す。御子柴來り。幅物を担保として金の融通を申込み十五円出す。康野茂に会い山口氏に売込みたる鯉代の勘定をなす。内金五十円請取れる旨を聞及ふ。堀越氏よりも手紙來り居り。山口氏に堀越氏間の打合出来居らざりし為両者より出金したる事となる。併し予の手にありたれば堀越氏の分は返却す（内山材木店に委託して）。

社会の今日 濱口主〔首〕相ソ〔狙〕撃せられたる由を聞く。

十一月十五日 土曜

快晴。午前九時組合支所に出勤すれば、増沢商店員降旗某來組し明十六日は公休日なれば序もあり、今日は非行かるべしとの勸言に急ぎ便を以て各理事に出向方を命したるに、幸各理事都合出来たれば、正午自動車を馳せて二台に分乗し、井深、工女松島まさ恵を連れ出向す。途中二時間半を費して午後三時増沢工場着繰糸器械を一覧し、持ち行きたる原料を繰糸せしめて後、井深と工女を置いて上諏訪布中別館に至り、増沢の取持ちにて理事八名晚餐の供をうけ、午後十時帰途に付、夜深更一時着宅せり。繰糸機は兼て原の自動操糸機を見た時、此の如きものを造らんにはと想像せしも、よく出来たり。只其の柱付の如何によりて車止の出来ぬ事は欠点なるべし。農村不況失業の多き時、

此の如き機械若しよしとするも、据付には考慮を要する所なるべしと思ふ。

理事が旅行して見学せんと欲するの時としてはよき企なりし。本塩より得所〔所得〕税調査員選挙の勘定書来る。

予記 濱口主〔首〕相は人物に於て見識に於て政事家として崇拜すべき人物なるも、其の政見の民主的にして我皇室を英国の皇室の様にせんとし議會中心とせる点、最も予の氣に食はぬ処也。

社会の今日 濱口主〔首〕相阻撃せられ危篤なる事に付相場高し。

十一月十六日 日曜

雨。終日家居して静養せんと試む。併し中谷武世へ青年会表彰の件につき却て彼等の為表彰の料を得たるを約する手紙、綾川武治氏に宛手紙を書き、青野少佐にも亦難局に際し乱れ行〔皇〕国を如何にして救ふべきかに付き、面語〔晤〕を得たるを喜びて手紙を書く、鯉商康野より山口氏に鯉を周旋してやりたるに付、礼に來り。残金拾五円を渡す。

午前十一時頃木下祐助父の金婚を祝ひ來り。次で牧内忠雄も亦慰勞休暇にて來訪し、彼等を相手に倫敦条約の不備と乱れ行く世態に付て、彼等か呑氣なる良民なるを戒め等して酒を置きて語る。牧内は海軍人なれば特に此点につきて話さんとして興味を有せり。鹿子木博士及加藤前軍令部長、末次同次官の風評につき、尚聞くを得たり。此日聯合事務所に部会開かれたるも、右の客を遇して欠席せり。忠雄夜に入りて撻代に向ふて去り。予は勞を慰すべく床に入る。

父、***の件にて上飯せり。増恵婦人会絹糸繰の講習あり。出席せり。風越の頂上に雪来る。

予記 十六日にて工場銀行共に休業したれば悠々自適する事とせり。社会の今日 早大、明大共に学生騒動あり。同盟休校頻出す。之れ学生の世界の不安か其頭腦に印するものなり。

十一月十七日 月曜

晴曇。産業組合製糸協会の臨時總會あり出席す。朝四時起き五時十五分八幡発にて行く。途中鼎、龍丘等十四組合同行し、上伊那亦出席す。問題は明年三月一ヶ月操業休止なりしか、既に先日伊那社に於て下伊那は満場一致反対を表明せしが、県組合製糸協会の幹部は既に東京にて賛成を余儀なくされたれば、之を組合側に強制せんとするものあり。一行長野県ソバ屋二階にて勢揃をなし、城山館の會議に午後一時なるを午後二時出席す。既に會議し居り。光沢の發案にて委員付託となり〔十五名〕、下伊那より四名、岡村、光沢、幾島、木下の四名となり、下伊那の決心を抗議せしめて一時間計りの後、委員外は去る。

下条の下田と二人汽車に漸く投するを得て、松本下車浅間小柳旅館に投して泊す。上伊那一行亦來り合す。本日の会合委員指名を平野、清水に一任して上記四名を得たり。余は特に初志の貫徹を期せられたしと述て去る。二階の會議にも行かず、既に此臨時總會に出席する事、其事が破れる基なり。下伊那は反対なれば其表明書をつき付け置かは可なり。

予記 出県して組合課杉原、製糸課長より高圧的なる圧迫をうけるが既に誤れる戦術なり。幹部は組合員の福利を計るにあらずして自個の榮達を之れ事とする。半政事家的輩のみ。

十一月十八日 火曜

晴。小柳一泊、起き出つれば銀世界なり。積雪寸余快よし。風呂に入りて体軀を延はせは、伸ひ／＼として心地よし。下田氏と同宿し、下条方面の話をした。九時、松本駅より伊那へ帰る。途中伊那町にて千章を伊那病院に訪ふ。苦言と激励とをなして、早く体力を恢復し退院、自宅に於て悠々自適すべしと説き、彼が小事に小心翼翼として身体を反つてルイ「羸」弱に導く事を戒めたり。

又赤穂支店を訪問し、信濃銀行支店の状況及其他支店の状況に付委細を聞き、新井次席より種々の話ありたり。又伊那支店に於ては菅沼支店長より報告をうけたるも、其の要領極めて悪し。

午後四時帰飯して、直に聯合事務所に猶興社創立総会に關して会合を開置きたれは出席す。中原、吉野来り居りて話したるに、中原は去り、吉野と携へて仙安に入り、市瀬も亦来り会し、秦少将来講の日を俟つて猶興社大会を開く事とし、赤神氏の時は作興会青年幹部講習のみの事に付きて赤神氏を召きて話す事とせり。かくして猶興社が此の廢頽し行く世態を黙視するに忍びづ立つことを約し、血盟の士数十名を得る事に力を注ぐ第一歩をふむ。併し世人、多くは衣食の徒のみ、国を憂ふるもの少し。あゝ。

社会の今日 エロ、クロ、ナンセンス、マージャン等、亡国的傾向数ふるにいとまあらず。

十一月十九日 水曜

晴。吉本屋の婚礼祝儀に招かれたれは、午前十一時出席す。これより先、組合支所にて松島乙次郎と会い、倅、泰雄が飯田にて遊里に足を入れ青年訓練所等の教育係として同僚より評判悪しければ、此際結

婚問題を急ぎ、大切なべき青年期を誤らせざる様せられたしと、他人の事ながら注意せり。吉本屋祝儀は午前十一時より、予が高席にて、次て大平、金田等之に次ぐ。午後三時終りて散したり。客は主に村内のものにて八幡耕地内のものも大半を占めたり。吉本屋婚礼披露宴の後、松村祐太郎死亡葬式あり。酔後なれとも見舞ふ。葬式に間に合ひ、弔詞を産業組合長として元理事なりし縁故によりて読む。第一工場を参観して帰る。銀行欠勤せり。

信濃銀行取付以来、六三、十九等の大銀行多少の傍杖を喫し、信州の銀行界不安の極に達し、種々の風聞を耳にせり。

予記 席岩専蔵に五葉松を送りたるに、礼の返事来る。

社会の今日 明大、早大学生の同盟休校、世相險峭なり。国民の無氣力甚し。

十一月二十日 木曜

雨。年貢収納日なれば朝来持ち来れるもの多し。午前十時半頃より雨降り始めたれは、銀行に出勤す。***問題、両三年来不如意となり、整理／＼のかけ声のみありしが一向に進捗せず、父農工に行き牧内支店長と会談せしも、遂に破産に至るより外なからんとなり、信州銀行界不安の状況益々甚しく、六三の取付等の評あり、又百十七の閉店の如き噂も、長野より出てたる由、松沢六三支店長より聞及ひたり。諸種の風評来りたるも、当行としては百十五万円の預金に対し支払準備五六十万はあり、何とか此難局は漕ぎぬく事は得べしとなせり。組合へは行かず。農会より臨時評議員会を開き、表彰につきて話す。市場鹿太郎を表彰すべく推薦せり。

電話にて竹村農会長に申達せり。

十一月二十一日 金曜

雨。組合支所に行きて、市場太次郎の砂余留の地所、七セ〔畝〕二十四歩を引受ける相談をなす。父と話し合ひ、六百円迄救済的に買受けてやる事を諾せり。曾て諏訪へ行き、繰糸機の増沢にて試験せるものを見たる時、試験繭を持参してとりたる検査を見る。八十七八点以上のものでよき機械なる事を知る。要するに、多条繰にて廻転緩ならされは、良き糸はとれぬ事に決したり。後、銀行に出勤す。聯合事務所に下田を訪い、木炭検査の事を原に話さんとせしも不在に付、作興会の話のみにて去る。原、銀行に來りて木炭組合より非公式に木炭検査人派遣方を頼む。購聯支所にて、全購聯來りて肥料配合、其他購買の話あり、一時間計り出席して其の要領を聞く。午後放課後、北信方面に於ける銀行界の危機に付評定し、今となりては如何ともする術なし、運を天に任せるのみ。併し当行はバランスを縮小せる為、此間のパニックは其の災輕かるべし。流言蜚語百出、薄氷を踏むが如し。社会の今日 明大騒動甚し。

十一月二十二日 土曜

曇晴。朝八時十三分、赤神氏、青年講習の為來郡するので、飯田駅迄出迎たり。郡青年が上飯田、松尾、根羽等で講演をすべく、予の召介により赤神氏を頼む。赤神氏は、座光寺氏と余の二人にて駅頭に出迎ふ。直に常盤館に投し面接す。正午より三宜亭に於て、作興会主催の講習生同窓会に出席す。赤神氏を囲みて話す。坐談会上、政治に関する談、倫敦海軍条約の話、外交の話、日本外交の弱き話、経済の行つまれる話、農民の政事に目醒めさる話等あり、ドンブリ飯を食いて話す。予は赤神氏を伴ひて会場に望み、又伴ひて歸る。

銀行にて前沢俊三氏來訪し、***整理問題に付氏の意見を聞く。農工次席小林氏に、今一度父より話置かれたしとの話あり。競売により問題が深刻となる故、其手配なし置くより外なしと話し合へり。銀行問題危き話のみにて、業務閑散なり。

午後五時より鳥金に於て清雅会あり出席す。赤神氏は浩漫有為の士なり。其談話力あり、其風貌に才氣と話力汪溢す。綾川氏に支局は見合、購読者を増加する旨申送る。発信 綾川。木下勝男。

十一月二十三日 日曜

晴。組合の事、銀行の事等、自分の關係せる事業につきて、心配常に胸中に往來す。殊に作興会の事は、財界不況の結果、一般民衆は自己の経済上の立場のみを考へて他は顧みず、会の経費等は殆んど省みられざるに至るべきを思ひ、如何にして国民精神の作興を測らんかと、常に腹裡には往來するも、教化事業や宣伝では、此沈縮せる祖国の現状を挽回するは到底能はざる處なるべし。難事中の最難事に身を投せる予は、今更如何にして作興の精神を蘇らしむべきか、考へれば考へる程夜も眠られざる事あり。

組合へ行きて青山と話し中、下久堅より理事某二名來りて、組合経営の事に付て質問あり、話して午前中は終り、午後仙寿楼に於ける南信新聞重役会に列す。七月社内整理後の報告あり。幹部殆んど全員出席せり。日没時、再び組合本所に行き現業員会に列席し、事業上につき激励し、尚將來の發憤を希望し、午後十時帰宅。

悠々自適、家居したかりしも能はず。

予記 教育会主催、宇井伯寿博士の「松本仏教」の話を聯合事務所に

て一時間計り聴く。下伊那の教育者は知的に仏教を研究せるもの、如し。

社会の今日 山梨大将、一年六ヶ月の禁錮求刑あり。

十一月二十四日 月曜

晴。本所より銀行へ例の通り通ふた。

十一月二十五日 火曜

晴。組合支所から上飯、銀行へ出勤した。銀行は上伊那方面より当行の悪評を伝えられた。辰野、高遠支店等は緩慢なる取付状態となつた。大平頭取が県会議員中の委員として大蔵省に県会の決議を以て上京し救済を頼んだ事が、資金の調達に行つたと云ふ様に解されて、種々の悪評も出た。頭取の県議は、誠に此際の厄介物である。放課後、行員を店内に集めて、恵比寿講の内祝をした。併して余は、当行が昨年より金融界に今日あるを予想して、画策其宜敷を得たから、不況の財界の時でも粗末なから恵比寿講の祝をする^と演舌した。

田中句一郎から電話で面会したいと話があつた。其時、今日は出来ない^と断つた。併し話は給料支給問題ではないかと聞いた。処か余はあの件ならば、十二月と理事会に於て決した事である。今更会ふ要もなかるべしと告げた。田中も怒つて話を切つた。次に吉川が出て、是非話したいから鳥清へ来いと云ふ。然らば五時半過に行くと云ふて、鳥清で会ふた。田中、江塚、吉川が居た。三者共予のやり方の悪いと責めた。田中と予とは、鋏角の衝突をした。江塚、田中は青山の命をうけて、決議録の署名其他に付ては専務と共謀した事は明かになり、此鳥清の会合は結局衝突に終る。

十一月二十六日 水曜

晴。朝組合支所に行く。青山専務欠勤す。給料支給問題に付、感情を害して欠勤したるものなるべし。午前中組合支所に居て、午前十一時上飯す。

朝四時三分強震あり。昨夜鳥清にて吉川、江塚、田中等の予に呈せし言より、万一専務が辞職てもすれは如何にすべきか。銀行を辞する事も出来ず、さりとて又組合も辞すべきではない。組合の事業の方が銀行業よりは面白くもあり、やり甲斐もあるが、併し現在の状況では、予には理事中でも支持者がない。誰も予に対して支持するものもなく、多くは専務派だ。然りとすれば、予が組合へ没頭するには大英断を要するし、且又勤務も中々エライ。実現「現実」よりすれば、イツソ専務を退かしめて、組合に没頭する方かよい。併し銀行の方も難局たと云ふて逃げる事も勿論出来ない。進退両難に陥つた、等と夢裡にも考へて居ると、地震だ。遂、朝遅く迄床に居て、組合に対する策も考へて見た。遂に何、一応吉川に話せと決心した。午後五時頃、吉川より電話があつて、吾々三人に任せよと云ふたが任せなんだ、一応君に直接遇ふて話して後と云ふ事を返事した。所得税調査委員が仙安に集まつて税務署長と面会して、農村の不況、地主の所得の少き事等を話して参考とし、次に馬淵氏を仙安に招きて懇談を催した。

社会の今日 朝四時強震あり、皆目^{マユ}にさます。後より伊豆旦那野か震源地にて、死者、倒潰家屋等多しと聞く。

十一月二十七日 木曜

晴。床中にあつて醒むれば、種々組合に關して苦慮した。青山専務からは果して辞表が出るかと思はれた。併し之れは杞憂に過ぎなか

つた。先づ石原を訪問したが、面会する事は出来なかつた。組合へ来て石原に次の様に話した。毎度困ると兄の処へ話を持つて行くに、或は却て御厄介に感ぜらるゝかとも思はれますが、兎に角聞いてもらい度と前提し、専務との間に意見の相違があつて、従業員の手給引下に付て十一月よりと専務は主張し、予は十二月と役員会に於て決したる件につき異論を互にて唱えて居たるに、此頃吉川、田中、江塚の三理事より話あり、組合長は専務の顔を立てずして、十二月よりと理事会決議を十二月よりの訂正せりとて責め立てられ、専務は風邪にて休み居れり、如何にすべきかに付研究中なり。予は専務に、何故執行役員が、他の理事は万十一月よりと主張するとせよ、君は十二月よりと主張せざるやを詰り、遂に物別れとなれり。要するに、其後専務は江塚、田中に泣きつき、組合長を責むる事を頼みたるもの、如し。此の如く組合長を動かすに自らせずして、他の理事を頼みてなす等とは、甚だ予の解する能はざる処とす。若し此話が他に洩れ御耳に達したらば、其心地にて中裁せられたしと頼み置く。金井理事を招致して、十一月三日理事会の決議は、事務員給料の十一月よりと決したるか、又は十二月よりとなりしかと問合せたるに、其辺は確ならざりしも、組合長は十二月よりと主張し居り、誰も之に反対するものなかりしと話せり。後本所に行き、田中理事に面会して、一昨夜の口論の解決をなし、予の組合毎々製糸組合に付き、将来の抱負として次の話をなす。

午後三時頃より、□所て吉川順治郎に会ふて話した。専務は事務□行役員とか事務員の形□になる様に□迫らなければならん。□何故□の理事の言のみに傾くか、不可解なりと、以前より事務員減給の成行を話し、情味のある話を一クサリして聞かせた。頭取か帰つて彼と話した。〔この五行分について、日記帳のコピー上部の切れのため、十

分な判読ができなかつた。涼とされたい〕

予記 製糸組合は機械繰糸により、二三ヶ村又は五六ヶ村集合して器械を備付け、組合製糸は同合して工費の節約と製糸の向上を計らざるべからず、然らざれば遂に落伍者とならん、松尾の如きは、上下久堅を統合して、松尾に工場を置くべきであると主張した。役場に本塩助役を訪問し、水城道路の改修費を調査した。

社会の今日 銀行界不安となり、百十七Bに対する悪風評、上伊那に漂ふ。

十一月二十八日 金曜

晴。支所へ朝出張した。吉川順治郎氏に会ふた。昨日、吉川は予へ彼の意見なりと云ふて、予をして名のみの組合長たらしむる話をして、銀行の方も多忙だから組合の方は青山に一任して、田中、江塚をして本所、支所主任としてやらしめたらうだと提案したのを、予は肯定した。銀行の方も、予は目下、頭取の不在と緩慢なる上伊那地方支店の取付とで、手が引けなかつた。上伊那、辰野、高遠の如きは、救を求めて安田から資金を借入て応急の方法を講じた。公債も殆んど投し尽し、其他の株券も持出したが、三十万円の借入には大に困難を感じる信であつた。有価証券は少し、親銀行はなし、信聯よりは借入も出来ず、如何にしてヨリ以上の取付に処せんかと、心竊に心配した。各支店へ貸附の極度の警戒をなす様、指令を發した。

貸付の断り方迄研究して、其やり方を電話で命ずる事とした。

猶此上取付を食はじ、支払制限をするより外途がなかつた。如何に成行くべきか、大に考へ物であつた。

予記 吉川順治郎より電話で専務との交渉か付いたとの話があつた。

発信 明宗和尚、晦坐書の礼。赤尾敏、日本主義戦線の統一の賛成。

十一月二十九日 土曜

晴。支所へ出て、市*太*郎より砂留畑七畝式十四歩（六八二六）を買入れたるに付、之れが抵当権抹消登記を組合に請求すると共に買受の登記をするので、同伴して組合へ行きたり。是より先、市*太*郎は、組合より土地担保七〇〇円、信用其他にて八百円を借入れ、又川路某より千円、其他にて約三千円の借金あり、蚕室を建築等したるもの皆借金として残り居り、家政整理をなすの要に迫りつゝ、ありしが、財界不況の結果、田地等は買入なく、殊に思想悪化の為、小作料の納入なき等より、小作せしむるもの等はなき状態なれば、何とかしてマカナイ呉れと申込まれ、致し方なく七セ〔畝〕二四歩を六百円にて買ひとり、小作せしむる事とせるものなり。

午後銀行へ出勤せしか、既に上伊那辰野地方は人気沈静し、流言も稍静みたる由。聯合事務所に行き、事務員給料減額の報告をなし、北原書記より各組合の状況を聴取せり。下田書記に対して作興会決算を促し、思想史の取引先を勘定すべく命したり。銀行へは赤穂、宮沢支店長来行、支店の模様を聴取す。

予記 夜、中原を訪問し、猶興社、実行会、作興会等の件につき打合をなして帰る。酒の饗をうく。

発信 垣内芳治、灸の事、計夫身元保証の事。

十一月三十日 日曜

曇雨。年貢米約百俵収納す。本年は稀有の豊作にて、米価九月頃より暴落し、大相場三十円より十七八円に暴落す。依て年貢仕切りも一

駄十三四円に過ず、繭価の一貫目二円と対比して非常の農産品暴落にて、政府は米の買上等に努力するも其効少く、農村の疲弊其極に達し、人心悪化して不安を懷き、年貢不納同盟等各地に起る。幸に拙家には起らず。米の量も十七貫位あり。農民の収入は米繭価の暴落によりて甚しけれども、税金は余り降らざれば、税金滞納者も追々多く、教育費も削減説起り、販場事務費、組合事務費、教員等の俸給も二割乃至三割減を実行するの止むなきに至れり。財界不安の結果、借りたものは返すな、小作料は不納せよ等の声、到る処に上る。村は失業救済の為、役場前より水神橋に至る県道路を開修し、八幡駅より組合前迄の道路を水城耕地の奮発によりて改修せり。午後より小学校に訓練所（鼎、松尾）査閲あり、間野少佐来りて査閲す。査閲に臨席す。間野少佐に会ふ。大沢、茂尾、文部大臣より表彰せられ、披露あり。父招かれたり。

予記 今村良夫より優良青訓事情の原稿を示さる。

社会の今日 伊豆大地震、御内努金一万五千円御下賜あり。

十二月一日 月曜

晴雨。飯田へ行く。警察を訪問して署長次席に会いて栄転の挨拶をなす。聯合事務所に立寄りて、作興会々計四年度決算に付話し合ひて出づ。銀行に終日居りて、上伊那各地に於ける当行の悪風評（伊那電会社の窮状―伊原に百万円貸、伊那電株に投資したる事、共栄社投資、大平頭取の県会の委員として上京は金策の事なるべし等）あり。之に對し、上伊那Bは武井が頭取なれば百万円や二百万円は何時でも支払能力あり、と宣伝につとめつゝあり。岡部来行し、高遠の模様、林線の執務状況等につき話合せたり。安藤千代、謙蔵妻、筒井栄等揃いて

来訪す。父の金婚を祝いて、千代のみ宿泊したり。

猶興社の幹部会を三日聯合事務所に召集す。予と中原の氏名を出す。

十二月二日 火曜

曇。館林と面接する約束があるので朝九時出勤す。館林に、銀行悪流言蜚語は上伊那B方面同業者より流布せらるゝものゝ如くなれば、何とか取締られたし、銀行は一時に取立をうくれは必ず支払出来ぬものなれば、流言蜚語は最も恐るべきものなり、殊に之に対して互に若し悪宣伝をするとせば北信方面の如き事となるべし、信濃毎日新聞の記事の如く取締るとの記事が新聞に出るだけにても効は大なるべしと頼みたり。

伊那社に役員会あり、出席す。代表者会は午後より開かる。明年三月休業の委員会報告あり、其他を議したり。代表者会には青山見えたれは譲りて上飯、藤木某来行し彼の輕拳を恐縮し居れり。夜仙寿樓に於て田中署長、滝沢警部補榮転送別会あり、銀行より代表出席す。

呂新吾の呻吟語を読む。銀行界動揺下火の如く見受く。上伊那地方稍動揺し、辰野、高遠方面稍緩慢なる取付先月十六日よりありたるも、緩和の状なり。

予記 今村信夫氏に銀行にて実行社の件につき話す。

発信 大平頭取。

社会の今日 北信地方信濃銀行の閉店にて極度の不安に陥る。

【語句の説明】①呂新吾の呻吟語：明末の官僚、呂坤（一五三六―一六一八）による随想的政治論。全四卷。一五九三年（万曆二一）に最初に刊行された。

②信濃銀行の閉店：一九三〇年十一月六日、信濃銀行が支払い猶予令

を発表したことに端を発する。当日夕刊紙での掲載は差し止められたが、信濃毎日新聞のみが概要を発表したため、程なく県下各地に伝わることとなった。同行は六万人の預金者と三千万円以上の預金高を有しており、長野県内に甚大な不安を惹起した。

十二月三日 水曜

晴。朝、*次郎が来て、川路の債権者に返すのだから七十円貸してくれと云ふ。そんな金を支払つてどうする積りだ、元金ならよいとしても利子を組合から出して他の債権者を利する事は出来ない、川路を行つて元金をマケてもらふ話をして来いと申付けて返した。すると再やつて来たから、同伴して組合へ行つた。青山とも同様の話をして、川路へ田地をとつてもらふか元金をマケて貰ふ話をして来いと云ふてやつた。青山と話した。此頃吉川、江塚、田中の三氏か鳥清へ寄て僕を呼んで、僕が事務をする事に付て面白くないから、銀行の方も急しいし専務に一任して江塚は支所主任となり、田中は本所主任となつて組合の事をして行つたらば如何、と云ふ話があつた。予は、組合がウマく行く事なら賛成だ、併し青山専務にも話してもらい度と云ふて置いた。其結果、君を訪ふて右三氏より話があつた事と思ふ。青山云く、そんな話は病中聞いたが、真意か奈辺にあるのが不明なので、全快してからと云ふて置いた云々の話をなし、結局五日、吉川、田中、青山、江塚と予の五人が支所へ集まつて話す事として分れた。

銀行へ出勤した。既に午後、聯合事務所で猶興社の事を相談するので、集合を付けたので出席した。来会者岩崎、吉野、小林、今村と予の五人。時事益々困難黙視するに忍びず。両三年来感しつゝ、ある猶興社発会式を十二日、秦少将来峽を機して開く事其他を相談し、夜に入

り、百十七に事務を移し、夕食を共にして帰る。
社会の今日 小西町長名誉町長となつて留任の由新聞に出る。彼も止めたらよからうに。

十二月四日 木曜

晴。父の命によつて森本千歳が申出に応じて、今村憲長宅北裡の全人所有地と千歳小作部の所有地の境界不明に付、千歳の申出により境を見検す。初め憲長、図面によりて両者の地坪を計り分界線を付けると主張し居りしも、途の現状を見て境界を定め、下男及千歳立会の上境界を定めたり。元来此土地は今村憲長所有の藪は無くして、井筋（中島裡）の北には道と畑のみなりしものを藪を作りたり。之れ図面と反するものなりしも、主に現状と東境の石垣とを見て、目分量に境界を定め石を埋めたり。

銀行へ出勤すれば来客交々あり。又、聯合事務所下田に思想史の勘定の話をしたるに、都合悪しとの事に、中止して吉川を頼みて其の計算を行はしむ。又、猶興社騰写判を青年行員をして作らしめたり。腹力なく、思想史の欠損金等面白くもなき事件のみ多く、何となく不愉快なる日なり。組合の事等も夫々胸裡に浮ひ出、辰野支社店小原来行し、種々支店の報告をうく。

大原岩雄、父の金婚祝に來訪せり。

発信 秦少将、十二日の猶興社発会式。

十二月五日 金曜

晴曇雪。支所を経て上飯す。朝大原岩雄來訪す。曾て田中、江塚、吉川の三氏中介（仲）となり、予が銀行傍ら組合長として事務を見る

は却て専務との間に命令系統を異にし、矛盾あるを思ひ、予を押込め策を講じたり。近來、一般理事の予に対する思惑よろしからず、青山か其間に入りて策動するもの、如く、予は之に對して心よろしからず、何とかして専務に一言し度と心かけ居りたる際なれば、先般の理事会決議録問題も起したる処にて、夜に入りて専務と他の三人を集めて話する筈に付、午後六時組合支所に來りて左の打合を行ふ。組合の事務は専務に一任するも、重要な事項、例へは人事、外交等に関する事に付ては、一応予に計られたし、猶緊急事項は処置の上報告せられたし、予は邪魔物とせらるゝも敢て辞する処にあらず、随て將來自分の内、予か自ら出勤し、万事指図出来る迄は当分やつて見ようと話し合ひたり。又田中、江塚両氏はなるべく日勤して、専務を補佐せられたしと結へり。

予記 猶興社集会の手紙の原稿を告了、發送の準備せり。午後出勤し行務を見たり。

社会の今日 支那に対する日本の勢力、日を追ふて頽勢となり、満鉄の如き退嬰的となる。

十二月六日 土曜

雪。雪積ること四寸計り、大雪なり。朝支所に行く。青山と面見す。青山、唇をふるはして「理事会決議録問題を持ち出し、組合長の考へは殆んど全部の理事の考と異なる。私は組合長か私に黙つてアノ様な事をしてもらつては立場上困る。若し何としてしてくれなければ私も何と考へねはならん。猶、私に對してモロクしては困る等の話もあつた。」と突込んでの話を、予も之に對して、既に此話は吉川會計よりも既になしある筈なるべし、若し話してなければ話さんとて、先月廿

五日夜鳥清の会合にて、此問題に付江塚、吉川、田中の三人より予に對して、予が決議録を訂正したる件につき詰問ありたる事、及平和に解決せん事等話し合ひて、来る事務員会にて専務の立場よくする様話すべしと相談し、猶七日夜の理事会に就ても話し合ひて後、銀行出勤途にて西川の自動車に會いて、乗り込み上飯。猶興社発会式、百十七樓上に於てなす事にし、通知書を發送す。作興会の決算に付ては、下田に八日九日兩日なす由を告げたり。

銀行同盟会、仙安に於て開かれ出席す。大平頭取歸りたれば、面会の筈なりしも、面会せずして歸る。

社会の今日 選挙権者年令廿才低下説出づ。

予記 右の説に付ては、東日の如きは賛意を表し居たるも、既に普選が日本の政治を墜落に陥らしめたる原因となれるに、猶之を低下せんとするは國を誤るも悪しきものあり、況んや近来青年の思想惡傾向を帯ひ居る際に於ておや。

発信 千章。忠雄。

受信 千章。忠雄。守武幾太郎、蘇峯会。

十二月七日 日曜

晴。日曜日なので、組合の方は専務に一任して、作興会パンフレットの序文を苦推す。右パンフレットは「局地より見たる左傾思想の克服」と題し、中原君が松本支部高橋大佐から頼まれて書いたものである。元より、以前より中原君に依頼して書いてもらふ事になつて居たので、司令官に頼んで出版してもらい、之を作興の特別号として出す事になつた、其の小冊子の序文である。想かまとまつたので書きつ、あると木下光哉が来訪して、銀行に使用してくれとの事であつた

ので、銀行業の他て見るか如き生やさしいものでなくて、身体の虚弱なものは駄目だ、日本の青年は寧ろ海外に志すべしだ、若し出来なければ陸海軍を志せと勧めたり。病弱の静養旁々此不景氣に銀行等に職を求めるは不可なりと教へやつた。午後小学校に村聯合衛生会が内務大臣より表彰せられたので、表彰式に參列した。県衛生課長桜井氏も来り、警察新任署長も来た。

終つて組合本所へ行き、支所に転して夜役員会を開いた。近来青山専務に江塚、田中其他役員が同情して予の権限縮小にかゝつた。元より青山専務の熱心はよいが、彼が利に敏にして産業組合の大精神に欠くる所あり。常に予は其の点を彼に告げたり。其他の理事同しく利に敏なり。

社会の今日 世界も一転機にあり。英国労働党内にも民主政治を疑ふもの生し、予も現代日本の政治を見て同感なり。

十二月八日 月曜

晴。政党政事の墮落、多数政治の弊は曝露せられたり。政事家党人に權威なく官吏に又利あつて國家なし。教育者も亦大衆に迎合して人格教育なく徒に智術施す。國の一転機には妄論、迷説、大衆に肯はる今の世既に然り。何とか回天の大業を策すれども、共に語るものなし。自命を屠して此回天の大業に當らんとす。思想問題に渾身の努力を惜まざるも皆之に歸す。回天時報、勤労日本等机上に積み、天下に同志を求む。

銀行へ出勤すれども、作興会会計検査及尊王思想史決算につき聯合事務所へ行き、午後中等学校父兄懇話会に出席し、小山新校長の説を聞く。併も春日氏に比して新味あるも、未だ日本國民の中堅を造るの

抱負に接せず。大衆又知術教育に偏て人格教育を軽す。知術に耽るの結果不正試験をうけるに至る。尚夫等も帰宅すれば本と首引きなり。多種多様の課目につき、殆んど余裕なく勉強す。發育盛りの青年をかつて生地獄に投ずるの思あり。今日の教育は、知を後にして何ぞ人格教育に重を措かざる。試験の不正は之より起る。何ぞ先生自ら人格教育の指導に任せざる。生徒と起居を共にして恥ぢざる先生一人ありや等頭に浮ひたり。藤山の山本の子供会宿所を訪問して兄に面会し、転して飯田駅より常盤喜八の帰郷を迎へて帰る。

社会の今日 資本主義はイカンとは皆云ふ所なるも、唯其のよくない点は分配論のみと予は云ふ。

【語句の説明】①小山新校長：小山保雄。長野県飯田中学校第五代校長（一九三〇年三月～一九三七年三月在任）。

②春日氏：春日賢一。長野県飯田中学校第四代校長（一九二二年三月～一九三〇年三月在任）。

十二月九日 火曜

雨。朝九時銀行出勤す。文部省より社会教育官水野常吉氏、作興会調査の為来飯すと聞き、之を迎ふべく聯合事務所行、会計検査を午前中行ふ。

午後一時、水野氏及県社会課山際氏来飯、駅に出迎へたり。聯合事務所に案内して、作興会の由来併に下伊那に於ける思想状況の一般を話したり。掛川、小林、臼田氏、中原も呼び寄る。次て水野氏は松尾青年会処女会を見たしとの事で案内して松尾小学校に入り、小林校長、助役、塩沢、竹村与平、井深等より松尾村の状況より説き、訓練所、青年会処女会の模様を話す。終つてミドリに案内して晚餐を喫す。中

坐して組合支所に於て事務員会を開き、事務員二割給料減の話をなし了解を経べく、七月此減給問題起るや諸君が自発的に減給を申出たり、故に共存共栄の精神より五分減をなしたり、次に増々不況に入りたれば十二月より之を尚増加し、十二月より二割を減する事としたり、之を諒せられよと論したり。衆皆致方なしと肯す。二度ミドリに引返して水野氏に面接す。八時十四分八幡駅に送りて帰宅す。水野氏も下伊那に於ける状況をよく視察し、村の状況も察知し、又下伊那に於ける思想も大体之を知りて快よく当地を去り甲府に行く。

発信 垣内芳治、魚のセリ。

十二月十日 水曜

晴。作興会報特別号の叙文を書き、之を印刷に付し、曾て中原が原稿を書き、司令部にて出版したる下伊那に於ける赤化思想と其克服に付てを改題し、作興特別号として出版する事とせり。

下男を山本へ派し、炬燵炭を買入れしむ。

社会の今日 満州に於ける支那鉄道満鉄と平行し布設し、我退守の勢なり。

十二月十一日 木曜

雨。朝直に銀行出勤、聯合事務所に下田を訪問し、作興会々計検査を行ふ。下田、思想史に就ては其会計不関の様な立場にあり、命を奉すること少し。午後市瀬に会い、聯合分会が企画せる山本分会の秘藏品、乃木將軍の軍人御勅語写真版として出版に関する件につき、相談あり。協議中々六ヶ敷、山本分会より六名計り来り、聯分幹部と交渉したるも、折衝まとまらず終りしと云ふ。予は招かれてチトセに行き、

彼等と一室に会して宴をなす。山本分会は、利益金を得て乃木神社を作り、大クラウンドを造り度と云ひ出し、損をしたる時は責任を負はずと云ふ。遂にまとまらず終れりと。予は作興会々計を見て後、思想史に及び、思想史會計に付て決算を試みたり。

夜に入り、秦少将蕉梧堂に來られたれは伺候す。堂に塩沢、中原在り。中等學校配屬將校來りたれは、中坐して横田少佐の室に行きて、下伊那の思想運動を話す。横田少佐には初対面なり。ニコニコ笑ひて多くを語らず。秦將軍に明日猶興社發会式出席を頼みて去る。青年訓練所の用件にて秦少將來訪す。陸軍省より森本中佐來り、之を訪問したるに、西洋の個人文化が生活形式に現れ居ることを話されたり。併もそれかエロチックなる話なりし。戸山學校大尉にも會ふ。

十二月十二日 金曜

晴。中学校庭に於て青年訓練所指導員會あり、松尾訓練所生徒を塩沢が引連れ出張す。午前十時出勤す。鹿太郎出勤前來りて、太次郎が砂与留の畑七畝廿四歩を買ひとりやりたる件につき、登記料を太次郎が持ちたるは約束に反すとの事なりしが如何との事に、予は弗然として約束の時登記料は売手負担の事とせり。何ぞ親切を仇て返すの言をなすや。太次郎が家政整理に付、特にマカナイ呉れと懇望せられて、五百円―五百五十円の処を登記費売人持にて六百円に買ひやりたるなりと、橋場今村五六の宅地を枡屋か順太郎に坪金二円にて売りたる話等してやりたり。父と話し合ひて約束の通りとしたり。

銀行放課後午後六時より、猶興社發会式を樓上三階にて行ふ。幸秦少將訓練所指導員會にて來郡し居たれは、來賓として頼み、日本國體と太陽に就て、彼が太陽道を説明し、宇宙の運行と原素の運行と同一

なり、我國體も亦同様の運行をもち、総ての組織も亦之に因らざる可らざる事を説かれたり。會するもの三十余名、意外の參會者なり。握飯の夕食をとりて話す。予は司會者として遙拝座長等をなす。猶興社は日本主義により、思想團體の中心として我々祖先の血をうけて組織したる団体なり。百十七樓上に於て予が司會して發会式を挙ぐ。然る後チトセにて訓練所員及權田中佐、青野少佐を聘して會食す。社会の今日 猶興社發会式を百十七樓上に挙ぐ。

十二月十三日 土曜

晴。喜代來訪し今晩常盤喜八を召き夕食を供したければ來られたしと申込あり、諾す。組合支所に行き青山と面會し吉川芳太郎辭表に付て話しせり。曰く此經濟界動搖の時に於て重鎮が動く事は人心の不安を最も大ならしめてよろしからず。暫く留任せられんを望むと云ふにあり。其他二三相談して中学校に昨日と今日と開かれたる指導員會に出席の秦少將の帰隊を上郷駅に見送るべく行く。中学校には秦少將、森本中佐、青野少佐等居合せたり。中原と共に秦少將を見送りて中学校に關社会課主事を訪問し面會、挨拶を述へて去る。銀行出勤は午後一時なり。作興特別号出來たり。

午後五時帰宅して鹿太郎方へ召かる。別に御馳走はなけれども喜八と朝鮮の話を聞きて御汁粉の饗応あり。夜九時迄話して歸る。銀行より農工合併の紀念品時計持ち帰りたり。

吉野、今村、北信某訓練所査閲出來さる村あれば出張せしむるに付、金拾円前貸したるに付残れば返せと云ふ事を今村に告げたり。多忙なる日を送りたり。

十二月十四日 日曜

晴。組合支所に行き青山と相談せしに、予一人が特に訪問して密に話したる方宜敷かるべしとの事に吉川を訪問したるも、飯田に出て向ひたりとて不在なり。予め電話をかけ置きたるものなるも斯の如きは不誠意なりと窃に思はる。本所に行き財界の不況と組合の状況を見るに組合員の組合より借入金の子払ふ事能はすして整理不可能のもの多く、此未曾有の不況を如何にして漕ぎぬけんかと考へつゝあるも如何とも致し難く、先に預金の利子と貸付の利子を引下げ不況対策を講じたるも、より以上の不況の対策なく、長期低利の資金を政府に要望するより以外に何等の手段を見出し得ず。独り考へにふけりつゝ、ありしも名案も浮はされは、小学校青訓証書授与式に参列して再び本所に行き、時々来訪せる通信省某氏（吉川順治郎氏案内）より簡易保険資金の流用を自治体の手を経て行はるゝ事を聴き、好き参考を得たり。次で郵便年金に付ては深酷なる勧誘を排けたり。従業員保証積立金免除の件、不況対策講究の件、製糸機械研究の件等を専務と話して帰る。軽拳を戒む。贅言を省く事。直言せざる事を戒とす。社会の今日 仏国革命直前の日本。早大、明大等学生の同盟休校頻々、併も其の防止方法の要を得ず。

十二月十五日 月曜

晴。銀行出勤して聯合事務所に行き下田と作興会につき昭和四年度決算に付き命したり。原貞治郎に頼み十九日午後一時より作興会幹部会を開く手配を頼みたり。

頭取帰行する由聞及ひたれば待ちたるも帰行せず不在中なりしが在軍市瀬中原及山本分会より小林、尾沢、竹村、島岡等五名乃木將軍の

筆軍人勅語を携へて上京し、五十週年紀念事業として複製天下に頒布すべき用件を持ちて上京するに付、夜行上京する事となり此一行と行を共にす。右の案は中原と予との案なれとも、予は既に思想史にて多額の費用を負担したれば、軍人勅語迄は及はず能はすと答へ、山本分会は乃木神社を建築したければ其費用として利益金を惜しと話し、種々聯分と山本分会との間に行きサツありしが、聯分の事業として決行する事に決し乃木將軍筆を持参したるなり。汽車中甲府にて東京の江戸子大工と同車し面白い話をなす。

十二月十六日 火曜

晴。朝六時駿台荘に着いた。汽車中甲府より東京の大工四、五人乗込み三等客の夢を醒まし横たることか出来ず、中原と予との間に入りて酒氣を帯ひて江戸子弁にて大声で語る。携へ来れる酒を饗され語る中に本郷弥生町の佐藤清勝中将宅出入のもので、日本人は日本魂あるのみとの話出で工兵隊に在隊した事もある由等語り、甲府にて劇場の新築に従事せしも賃銀不渡りなれば帰京すと種々話したるに義氣に富みたる男どもなり。新宿にて分れたり。

駿台荘にて市瀬、中原、尾沢の三人軍人会本部へ行き佐久美大佐に会いて、乃木將軍筆軍人勅語を復写し全国に軍人勅語五十週年紀念事業として頒布し將軍の人格を偲ふと共に、廃顔せんとする士氣の作振に資せんとすとの話をなし、予及其他山本の在軍人連後より自動車にて本部へ行く。本部の話は微温的にして総て事実の後援はせずと答ふ（葛原冷蔵事件にてコリたれば）。在軍本部の隠居のみの集団にて為すに足らざるを慨して出す。越にて昼食して予は金鷄学院を訪問し安岡、東方両氏に面会し青年幹部講習に付て頼みたるに二月九日以前ならば

学院の都合よし又講習の「コピー切れのため、一行分判読不能」山本の連中は明治神宮を参拝し三三五々帰宿す。夜に入り信也、勝男来訪し携へて松阪屋にて買物して帰る。

【語句の説明】①佐藤清勝：陸軍軍人。一九二八年三月八日より陸軍中將。思想問題について多くの著作がある。

②葛原冷蔵事件：冷蔵船による運搬業務を行っていた葛原冷蔵株式会社が、資金運用に失敗し、一九二五年四月に経営破綻した事件。

十二月十七日 水曜

晴。朝十時半渋谷松濤に永田鉄山大佐を訪問した。市瀬、中原、小林の三名を同伴して、大佐は将来の陸軍大臣と囑望せらるゝ人、用件は乃木將軍の書、軍人勅諭の複写五十週年紀念事業として頒布の事であつた。大佐に話した処、大に賛成してくれた。昨日在軍本部の之に対する態度とは全く異つて居た。満州^{マニチウ}か帰つた計りて未だ登省せなかつた。満洲から退却する邦人の哀愁の話や外務省の対支方針の退嬰的な事を痛恨せられた。召介によつて東京警備隊司令部橋本少將や憲兵隊司令官万木大佐に紹介せられた。昼食を供されて後、橋本少將を訪れて「作興」を示し、思想運動の下伊那と赤化運動に対する対策とについて議されん事を懇望し、次で憲兵隊に三浦少佐を訪問し、二宮中佐、美喜大佐にも面会して左傾思想及運動の対策を聞き、一方下伊那に於ける克服を話した。二宮中佐は此頃の陸軍演習と之に対する下伊那人の態度の左傾恐るに足らずとの話を聞いたが、之れに對して予は説明した。話は夜に及びローソクを立て、話した。カンタン「肝胆」相照した。材料の見せてもらい度事等をも話して了解を得た。

宿へ七時、引上げ審美書院の横村に面会した。神田のアイマイの様

な料理屋で飲んだ。横村と軍人勅諭の複写に付て打合せした。

【語句の説明】①東京警備隊司令部橋本少將：橋本虎之助（一八八三～一九五二）。一九二九年八月から東京警備参謀長。同年十二月に少將に昇進。東京警備隊は、関東大震災に際して出された戒嚴令の廃止後の善後措置として設置。司令部は参謀長、参謀、副官、下士及び判任文官など十名程度からなる。

②憲兵隊司令官万木大佐：憲兵司令部総務部長、万喜八郎大佐（一九三〇年八月～一九三一年九月在任）のことか。

十二月十八日 木曜

晴。朝八時駿台莊を出て先づ文部省を訪いしか、社会教育官水野氏出席前なれば、転じて社会局文「分」室を訪問し古谷幹事に面会し左の質問を發す。一、国民精神作興をなし得たる実例、二、国体觀念を明徴にしたる実例、如何なる法方によるが最も適当なりやと話したるに他に適例なし。愈々赤化思想は拡染せられんとする状況なり。依て当作興會の話をなし日本青年の指導原理を何に求むべきか此指導原理を研究せられん事を望み、猶無関の大衆に對しては活動写真等最も適法なるべしと意見を述、次で文部省に水野氏を訪問し先般來訪の礼を述へ、作興一部を呈し思想善導法方を問ひたるも成案なし、仍ほ補助を頼みて去る。文部省の如きは單に上品なるのみ、役に立たず（特に今日の乱世にありては）。

皆川氏を丸ビルに訪問し思想史を同郷の士へ売込方を頼み、アイスクリームバーにて野口鹿兒郎に会い昼食を供せられ中央金庫を訪問して貸付主任に面会し度由を述べたるに、更科氏出て、面会し低利資金を求めたるも、素人の金融何のなす処もなし。調査課長の益田に会い

低資を問合せたるも要を得ず。此中央金庫等又何の役にも立たぬ長物のみ。転じて青山会館に守武氏を問ひたるも不在、山中塩に面会し蘇峯氏書の二字額を頼む。次に日吉町民友社に蘇峯氏を訪問したるに快よく面会し伊那の話出て伊藤秘書に書を頼み置きけり。次に日本新聞に綾川、中谷を訪問、多忙に付暫く話して三越松屋等にて買物して帰る。十一時半退京。

十二月十九日 金曜

晴。午前九時辰野着。支店を訪問して十一月中旬以後の悪評の結果に付模様を聴取し、十一時銀行へ着し午後一時より聯合事務所に於る作興会幹事会に出席す。幹事会は昭和四年度決算及明六年度予算編成法針につき協議し、前者は臼田女学校長代田村長検査役となり監査を乞ふ事となり、後者は一割―二割減を以て予算を造り町村長会に呈出する事に腹を決す。猶下伊那に於ける思想問題克服の歴史的記述として中原氏が松本司令部より頼まれて記したる「作興」特別号を分配せり。一般思想の悪化甚しく左傾思想は一日は一日より伝般せられんとも恰も南北朝時代の南朝の感ある事を説明し日本主義に指導原理を求むるの要を説き、国体呪詛の悪思想を克服せざるべからざる事、青年訓練所方面を利用して青年思想の善導を講し居る事及青年講習の有意義なる事を述べたり。思想史に付ては特別会計となしあれば之を本会の記念事業となし今日に及びたるも残本二百部借金千円あり。追て会計報告はすべけれども会には迷惑をかけんとキツバリ言明せり。小西町長は不足分を個人で負担するのを見てくれと云ふのかと念を押したれば然りと答へ置きけり。幹事中に指導原理なきもの多し。

十二月二十日 土曜

小雨後曇。中島言一祝儀あり。招かれたれば祝品を持参して喜を言ふ。直に銀行出勤すれば金田金庫を探求して紛失品益々多し、必ず盗難にかゝりたるものならんと云ふ。担保品全部を二階に持ち出して取調を行ひたるに多額なるもの、み粉失し居り。片桐の仕業かと異句同音になり、金田片桐方へ行きて書類を搜索せしに関係書類を押取して帰る。愈々の確に片桐が米投機に手を染め麻木、斎藤忠三を介して銀行より担保を盗み出し居りし事を知る。損害時価見積りて十万円に及ふ。代田弁護士を招き放課後研究をなし、*桐一*を召致して情況を話し如何にせんかを問ひたるに、十万円以上と云ふが如きは到底弁償の限りにあらずは如何様にもせられたしとの返事に、直に警察に程出て頭取、代田兩人警察署長を訪問して内様を話し犯人取押方依頼せり。夜十一時頃迄にて一応検査終了し金田八時半夜行上京、盗品の取得方を奔走せしむ。*桐一*も来行して上京す。

十二月二十一日 日曜

晴。朝正親が青年会文部省表彰紀念品を持参してくれた。陶器火鉢、壺筒の寄贈をうく。太次郎ら来訪したる由なるも断る。銀行の片桐の費消事件にて夢と円かならず、度々夢さめて、或は貰り或は自己の不明と組織の不完全なりしを思ふ。朝十時出勤して銀行に在り、警察より電話にて関刑事と片桐より電報来りたれば行員同行せられたしとの申込に應じて、自動車をついて吉川を辰野へ派遣したり。大平来行し、原田、関島、木下等と盗難届及各会社へ名義書換停止方申送たり。代田弁護士来り、法律的顧問となる。池田愛泥を招きて新聞記者団の記事差止の計画をなす。吉川へ伊那町支店増田との関係を取調へしむ。

斎藤忠三取押の報至り新東八〇、伊那電二五〇株を押取す。予は頭取の命により警察へ行き署長に面接し片桐取押方を依頼し、又海野検事を私宅に訪問して全様の話せり。終日宿直部屋に陣取り各方面の形勢を見、手配せり。之を要するに一、犯人取押、二、贓品取得、三、新聞政策なり。

予記 之にて新聞は記事差止し得たるもの、如し。年末の折柄心痛特に甚しく時事民心鋭化し居り、銀行の重大時期なれば心配多し。

【語句の説明】池田愛泥：池田傳之助、南信新聞主筆。横浜毎朝新報、読売新聞での職歴を持つ。

十二月二十二日 月曜

雪チラ／＼。朝八時に起床して*次郎の来訪をうく。彼負債整理の爲如何にすべきか指揮を仰ぎ来る。前に土地をマカナイくれと頼まれ登記料売方負担に付意味徹底を欠きたる爲め苦情出てたるに鑑み、今回は謝絶せんと思ひしがかくまで困り相談に来るものなればとて、引見して彼の意志を問ふに、組合の整理を持分を一口のみ残して借金と差引し、残余は土地入担して勘定するとの事に、然らば支所に行きて其方法を講すべしと教へやる。直に銀行出勤し代田弁護士も来り関刑事も来行し、本人取押方を依頼し犯人の自宅搜索と新聞記事とに注意す。斎藤忠三は松本にて取押へ、伊那電株及日清紡とを取戻せり。

忠三は警察検足中、忠三宿松屋にて片桐よりの電報をうけ犯人の居所探知し得て、夜に入りて関刑事及岡島大吉を頼みて同行せしむ。金田より電話ありて株の有場所は判明し封印し置けりとの報告あり。片桐の財産全部仮差押する事とせり。犯行は地方にては秘したるも東京よりバレ来り、遂に明日の新聞紙上に出つる事となりたれば、各支店

に被害少なければ安心する様、電話にて申渡す。

予記 非常の場合は冷静を欠く事多きも、却て此の如き時は落付居たり。軽率是最も戒むべし。

発信 横田中佐、思想史二部送る。吉野福一。

十二月二十三日 火曜

曇。大工源一の結婚祝儀に招かれたるが祝儀を持ちて訪問したり。

銀行出勤すれば、代田弁護士其他新聞記者等来訪多く、記事を伏せて却て揣摩憶測せられるのを恐れて池田愛泥の手を経て記事を掲才方を頼む。各地方新聞一切に掲才せられる。併し最も被害は軽微なりしとウマク新聞記事に出づ。片桐妻子兄一□等帰行し直に警察へ出向す。片桐亨次郎越後親不知にて逮捕せられたる由聞及ふ。警察へ盗難届呈出し彼より後より盗品出づ。夜家宅搜索の結果新東八〇、其他雑株数多出づ。片桐事件にて殆んど事務忙殺せらる。併し此事件の波及する所如何と気つかひしが、取付等の事はなかるべく余り大影響はなかるべしと思はる。機敏に活動したれば多くの盗品は押取せられたれとも、之を返還し得るや否やは未だ研究せず。

被害は僅少二千円位なりし、と新聞に掲けたれば此の効果よろし。

父にも新聞に出るを恐れて片桐事件を話す。

予記 聯合事務所に各団体長会議ありたるも大平出席したれば予は欠席す。頭取仙寿楼宴より帰りて予に実務に当りて熱心に掌執せず、然らざれば止めよとの事を言ひたり。

社会の今日 財界行つまり税金は下らず。殺人的の不景気なり。

十二月二十四日 水曜

久しく組合へ出頭せされは年末の状況如何と組合へ出向す。支所より電話にて専務に話し銀行の盗難も議す。今村光治来組したれば以前より懸案となり居る国晴と椀屋との間に横はれる北河原土地売買の件につき話す。何とか解決すべく国晴を同行して来られたしと告げたり。次で工場を一巡して上飯、銀行出勤す。来訪者多く小林高等課刑事来訪し金融状況と人心の不安に付話す。次で*桐一*、岡島大吉の両名来り、亭次郎の不始末に付寛大なる所置をとられん事を懇望して退出す。頭取不在、長野県農会行。

夜仙寿楼に於て伊那社主催忘年会あり出席す。席上松沢数一あり、此際銀行を止めて組合事業に没頭せよと忠告あり。倉沢卯之助は作興会の本趣を知らず、作興会の無用論を吐く。

清雅会仙安に開かれたるも講金のみ出金せしめ御馳走をもらはしむ。一般世間か銀行の内幕を疑ふと共に常務が信用の地に墜ちたるを思ひ社会に対して面目なし。予は昨日頭取の言によりても一考し、又既に此事ある前より頭取が県会を止めたれば其機を利して引退し銀行界を去らんと決心せり。

予記 此議会は喧騒混乱の議場なるべしと予想せらる。
社会の今日 五十九議會開院式あり。

十二月二十五日 木曜

晴。大成天皇の御陵を遙拝す。午前中数日來の疲労を医すべく朝八時過迄床中にあり、身体倦怠気味にてイヤ／＼起き出たり。父の所へ前沢俊三氏来訪し、父金婚を祝し且又*屋整理問題の顧問として話すもの、如し。午前中新聞を見されは古新聞等読む。午後に至りて組合本所に理事会あれば出席す。支所へも寸時顔を出す。本所に於て

理事会を開き終つて全理事を招きてミドリに於て忘年会を催す。組合にては銅像問題を始め種々の問題起り多事多難なる年なれば此の如き年は忘失して多幸なる新年を迎へ^マとしてなり。午後九時頃迄飲みて散し帰宅す。ネ〔寝〕汗出す。

信也、尚夫等に命じて年賀状を捺印せしむ。組合は財界の大不況に組合員にして利子（借金未支払共）を支払ひ得ず勘定を求むるも来らざるもの多くなり、之れにては決算出来すとなし、仮渡金を三十錢又は五十錢増加して之を担保として六月迄貸付く事として整理を立つる計画をなす。種々議論も出てたるも之にて決行する事及増沢繰糸機を試験的に六十台据付る事の決議をなせり。銀行は休みたり。銀行業は權威なき業となり、万一の事あれば私財迄も呈供せざるべからざる事となり、祖先伝來の資産を有するものは手をそむべからず。

岩帛専蔵より、金山寺味噌壺樽贈り来る。

十二月二十六日 金曜

晴。凍豆腐には好適の氣候なり。組合支所を経て銀行出勤、市*太郎来訪して家政整理として持分を差引残借金は土地を入担して整理せん事を乞ひ来り、専務に話して其様に取運ふべしと告げたり。

本日より本支共供繭担保三十錢―五十錢の貸付を始め、それにて整理する事とせり。無門会大接心会二月十日より十四日迄と決し仏心に其広告をなすと聞く、其宣伝文を記す。午前十一時出勤す。事務上に歳末の気分漂ひ店頭賑ふ。井出吞仏来訪し定期予金書替に行けり。午後重役会あり、片桐問題を先に報告し、原田、金田両支配人も亦陳謝せり。重役会終了後仙寿楼に夕食を喫す。太田穰一曰く、銀行の業務に面白からざる点あり、貸付係のやり口は氣にくはず又常務は常に店

頭に出て事務に掌執しては如何と。予は之を聞き申す、然るべきものなれども、予としては難事なり、予は単に頭取県議中不在の留居に來せるもののみに思へり。此言を聞いて既に此回片桐の事件を思ひ支店に威令の行はれざるを名として引退する潮合に至れり。大平氏も吞氣な事を考へ伊那電や銀行頭取等をなし、自ら郡農会等にも顔を出し居り銀行等の出勤日は少く自ら浮いた事のみ致し居れども、将来は資産を尽湯すべしと予言せり。新作より貨金九円送り来る。

十二月二十七日 土曜

晴。銀行にて朝より事務を見る。頭取出頭せず吞氣なるものなり。午後二時聯合事務所を下田を訪い思想史売上代金を集め、又作興会事業報告書を作製せしむ。昨年作興会予算に付原幹事長と話し合ひ予算を切りつめたるものを明年一月早々中原君等にも来てもらい作る事とし度しと話したり。銀行放課後忘年会を行内にて行ひたり、牛肉にてなす。代田弁護士を招けり。酔に乗して関島と国事を談したり。頭取か野球の寄附金を予と同額たらしめたる事及新聞記者の寄附帳に予が記載せざる事を冷笑せるも頭取が交際費を以てするものを常務迄に出さしむるは頭取の人を使ふの腦力なきものにて頭取の面白からざる仕打不平に堪へず何とかして此桎梏より免れんと法方を講しつゝ、ありしか、此回の片桐事件にて其機を得たれば一月の総会終了後にて、辞表を呈出して權威なき銀行業より身を退かんとす。父に歸りて其話もなしたり。

予記 予が銀行へ出て給料を得るは国事に尽す為にて敢て衣食の爲にあらずと関島に話したり。田島熊次郎より富士縮一反贈り来る。又赤神良讓氏より「反対表現の思想」三部贈呈せらる。

社会の今日 五九議會。開院式の記事出づ。定めて騒然たるものなるべし。

十二月二十八日 日曜

晴。組合へも行かすして年賀状を書く。明年の年賀状は例の元正啓祚万物咸新の自刻のものなり。昇堂に全文の陶印を作らしめしが面白からず。之を用ひず、朝より終日炬燵に入りて年賀状を書きたれば肩こり足しびれて食進まず。組合へ見廻りに行く予定なりしも之にて終日し何事も出来ず。木下謙藏夕刻返札に來訪す。小学校も休みとなり子供家居したれば坐敷を開放して家内樂団して茶を喫す。宏身体も心も弱く如何に成育するや心配なり。組合も氣にかゝり居れば明日行きで本支の年末勘定の模様を見る積りなり。日曜日にては終日家居したるは稀なり。

社会の今日 年貢仕切一駄十三円と定めしも近來にては十二円位なり。

十二月二十九日 月曜

曇晴。夜来少雨あり、暖氣増し三月頃の氣候の如し。組合へ昨日顔を出さざりし故今日とは思ひ支所より本所に行き、青山専務に会い打合をなす。本所の店頭組合員勘定に出て來り、群をなす。先般理事会も此年の応急策として配当担保の三十錢又は五十錢の貸増を行ひ貸金利子の納付をなさしむ。其結果決済付き店頭群をなせるなり。午前中組合本所に居りて午後上飯す。頭取伊那電總會にて欠勤したれば放課後金田と業務上の打合を行ひ、且又栄明堂へ注文したる晦堂先生の書幅を表装しかけた。近來の不祥事の心を医す。山含^(ヤマ)雲とあり、其書の雄渾なる面白し。一暢蘭に岩の画讀は金田に贈りたり。組合には娛

樂会ありたるも欠席したり。

組合繰糸は今年度は今日を以て終了とし、明年は六七日頃より始むる事とせり。予の思ふ事と其の態度と一致せず、極めて平易に解し又平易に事をなす癖あり、軽率の如し。

家にてはオヤスを作り入浴して少々頭痛すれは寝に付く。

予記 年賀状出す。

十二月三十日 火曜

晴。朝八時半森本泉太郎の貧窮を見舞ふべく組合より救済金をとり出し持参したるに、今朝一時死亡したる処なりしも組合のもの等に話して見舞金七円を贈りて見舞ひて出づ。銀行に出勤すれは頭取は伊那電より帰りて今日は出勤せずと云ふ。借金の断りや店頭の伊那電配当の状況を見て歳末金融の急はしきを見て重役室に沈静を装ひつ、控へたり。午後池田愛泥来行して無心に来りたるも頭取に話しある旨を告げてウマク排出せしむ。年末の諸勘定して預金を引出して支払に当て終日虚々実々の懸引して居たり。松沢数一來行して予に村へ帰りて産業組合の仕事に没頭せよと勧告をなす。既に銀行業の如きは自らも不適任とは知りつゝも携はり居れるも、松沢の忠告尤もにて、何時か機会を見て銀行界を消し、組合事業に没頭したる方予の自ら有意義なるを知る。伊那社事業納めの通知ありたるも欠席す。

午後七時銀行員に業務整理を托して帰宅す。団欒の温味に浴する父金婚式に付、各親戚等より祝ひ集金三十五円余あり。之を家族に分与あり、各五円宛の配分をなす。

予記 田島熊次郎より富士縮の贈呈を歳暮としてうく。本年は読書の暇なし。

社会の今日 政治、思想、財政、道德の腐敗、人心不安の内に年も暮れんとす。

十二月三十一日 水曜

快晴。組合へ行つた。支所で木炭検査の為、熊谷氏から来組するのを待ち合せた。併して年末の整理状況を見て本所に向ふた。本所でも木炭の検査をした。併して整理状況を見て飯田に上つた。銀行も利子の収入に全力を傾注したので案外収入の具合はよかつたとの事であつた。夜十一時迄居合せて、支店からの報告を集めて行員賞与金壹割減（五、四〇〇）其他の件につきて頭取と電話で打合せた。有価証券評価損を一万五千円程度とした頭取との間の交渉は遂に要領を得ずして報告をして置いた。頭取は大なる最後の欠損を蒙るものである事を知悉して居まい。銀行業と云ふ様な仕事は既に時代が面白味のない事である。資本主義の調落は銀行業は面白くない仕事の裡書をして居る。私財迄も提供せねはならん銀行業から身を引く日は追々に迫つて居る。何時か時を見て逃げるのか賢なる事である。一度年取りの膳に付いて再び銀行に出勤した。

年賀状は元正啓祚万物咸新の版を捺して置いた。四百枚計り出した。

補遺

三月廿八日、支所に於て組合惣代協議会開かれ、席上、竹村と高橋君に内務省令に関し見解記憶の相異論あり。役場より規則書を取りて見しに境内又は其近接地とありて、それには国家に功労ありたるものに非れば銅像等建つべきものに非すとの解釈に決し、田宮善治より内務省運動説出でたるを以て、先づ之にて中止するか猶内務省に運動す

るかの二説に付、決を無記名投票に問ひたるに三四対一二位にてアキラメ説勝ちたり。然らば次の候補地を如何にすべきかに付話しつゝ、ある間に、竹村より江塚佐太郎を説服して自発的に桜畑へ建設を乞ふ旨を云はしめ、遂に塩沢新九郎より一同に対して善三の遺志なれば何卒桜畑へ建てられたしとの動議を出したり。其に決する前、高橋演舌して曰く、組合長は須く徳を磨くべし、営利の為、功名の為に組合長となるは不可なり等の事及政治は暗い事はよろしからず、明なる政事をすべし等より、予に対する惡風説を述べ、問屋手数料問題等を述べ自分の村議戦の事迄も述べたり。之に対して予は弁明を試み説て名利の爲ならず、組合長の椅子に恋々たるものにあらず、寡徳なるは止むを得ずと一矢を報ひたり。其の間に塩沢新九郎は竹村に諮りたるものか自ら親類を代表して桜畑は善三の遺志もあれば桜畑に決せられたしとの申出あり。満場一致之に賛し、予も礼を述べて分れたり。

石原に会いて予の決意を話したるに今少し考へられたしとの事に予は帰宅して熟考せり。

三月廿八日、組合長辞表青山宛書留郵送し。

四月十日、吉川芳太郎、石原茂一両人の口聞にて右撤回せり。

千代田合名会社第一期營業報告書調印、税務署へ提出せしむ。

六月十四日付理事全員、百十七銀行宛、当座約定書、保証書三万円、出す。

六月十九日、理事全員判、信産銀行へ当社約定書保証書金七万円差出。

昭和五年は実に多事多難な年であつた。総選挙民政党の絶対多数、大官連の犯罪、政治の腐敗、道德の弛緩墮落、思想の混乱殊に左傾亡

国的思想の抬頭盛なりし事、財界の不況等、倫敦条約の屈辱的加判、国民の気力は單に財を得んとして窮々として居り国家の發展等に就ては殆んど省みない無意気甚しく、満蒙よりは漸次退却して内争を事とする。コンナ状態では国家の前途は憂ふべした。

自己の事項につきても多事多難であつた。(一) 組合に対するもの、イ、江塚の銅像問題、ロ、事務員の給料支給問題、ハ、組合員の財的打整等である。(二) 銀行の方では信濃銀行支払停止(十一月六日)か百十七銀行に波及せる事、上伊那支店に緩慢なる取付行はれたる事と片桐事件等である。一つもよい事はなかつた。九月の所得税調査委員選挙では無競争であつたが、最末点の六十八点で当選した事であつた。

実に本年は多事多難であつたが、よい修養にはなつた。組合も如何に波瀾かあらうとも組合長となつた以上は組合と生死を共にする決心をした。銀行は面白くない商売だから何時か去る事も決心した。

家庭に於ては両親か矍鑠として居る事は一番うれしい。子供も丈夫に育つ。

身体も健康で一日も寝に付いて居た事はない。活動すれば丈夫である、活動するものに病はない。殊に難局に当るのは男子の本分である、難局を通過した快味は弱者には味ふ事の出来ない痛快味であつた。彼の江塚の銅像の建設地問題も一時は予一人の上に覆ふて来た。併し江塚善三其の物の人物をよく知悉して居る予には、彼が組合を創設した事及事業に対する事業家としての功は認むるも、銅像に値する人格者なりしやは大なる疑問とする所で、〔中略〕。之れは黙して誰にも話さなかつた。組合に対しても銀行を引受け作興会を負ふて居るので勤務はせなかつたが、大体方針は握つて居た。青山専務か余りに専断に予

の了解を経ずして田中句一郎等と相談して予の意志に反する事をした点は大に責むべきであった。併も彼は田中と結托して予を攻撃して来た。勿論一瀬牛太郎等か背後に居る事は明であつた。他の理事の如きは徒に迎合する連中のみで吉川順治郎の如きも我利一点の男である。組合も組合長となつた以上、恰も船長か船と生死を共にするの覚悟でやるのみだ。

次に銀行の問題だ。大平豁郎と予とは到底余りに相容れぬ性格である。彼が我儘をへこして県会に伊那電に農工に郡農会に総ての名譽職や俸給の多い会社に重役として顔を出して銀行を踏み台として居るのは却て銀行に対する信用を害して居る。十一月六日、信銀の支払停止以来百十七銀行の悪評は各地に挙つた。殊に信濃、高遠、伊那赤穂等に於ては殊に然りてあつた。伊那電の姉妹会社百十七の業態はよくないとか大平が上京資金の奔走中だ等との評は伝はつた。内部では福沢監査役山口取締役か逃げ支度をして居る事、年末に片桐亨次郎が大犯を犯した事等は愈々銀行の信用を害した。八九月頃は黒沢問題、橋爪問題等によつて信産の不評が伝へられたか、百十七Bの方は無難であつたが年末は却て不評が一時に起つて預金は減少し悪評は愈々伝はり実に四苦八苦の苦境に年を超した。

新年の年頭にある新聞を見て居ると次の様な予の肺腑をウガツタ忠告が表れた。「ソナナ軽ひ口のき、かたをすると人が馬鹿にしますよ」、之れは予にとつて大なる警告であつた。之れは将来大に金言として胸に納めねばならん事であつた。

猶興社を組織した。発会式も秦將軍の来飯を期として行つた。思想団体として作興会を外廓として中心が出来た。若い青年を以て中心として出来上つた。郡下の思想問題も三・一五事件、四・一六事件以来

蔭をひそめた。併し国体迄も咀呪する様な運動は今の青年の脳裡には蔭に醗酵せられつゝあるもの、如くである。予の銀行に出勤するのも只給料を以て生活せんとするのではなく、国体擁護と興國運動に存するのである。世人は何と見てもかまわない。

解題

有吉拓朗

一 はじめに

「森本州平日記（以下、「日記」とする）」は長野県下伊那の地方名望家森本州平（一八八五—一九七一）が遺した日々の記録である。大正六年から昭和四十二年という長い年月（病氣療養のため大正十二年は欠）にわたつて綴られた日記のうち大正十三年から昭和四年八月までは須崎愼一氏によつて翻刻され、その仕事を引き継ぐ形で東京大学文学部および大学院の日本近代政治史ゼミによつて昭和六年三月までが翻刻されている。⁽²⁾ただ昭和五年九月から十二月に関しては翻刻がなされていなかったため、今回それを補う次第である。

下伊那郡山本村（現飯田市）竹村大助の次男として生まれた森本州平（以下、州平とする）は満二十歳のとき、同郡松尾村（現飯田市）の森本勝太郎（当時、県会・郡会議員、一八九五年より村長）の長女増恵との養子縁組によつて下伊那郡有数の地方名望家であつた森本家の嗣子となつた。⁽³⁾州平は大正六年の青年会長就任を皮切りに村の役職を歴任し、本稿の対象時期である昭和五年には村会議員、産業組合長、在郷軍人会会長を務めている。⁽⁴⁾また、須崎氏の「解題」によつて州平が伊那社（下伊那郡の産業組合製糸）の役員、百十七銀行・南信新聞の重役、下伊那国民精神作興会の専任幹事となつたことが知られるが、⁽⁵⁾

翻刻された日記の内容から、昭和五年においても州平がそれらの役職にあったと考えられる。

このように多彩な州平の経歴のなかでも、とくに注目すべきは国家主義運動への積極的関与である。下伊那郡では大正九年ごろから青年層の自主化・左傾化が進行し、大正十三年三月には「⁽⁶⁾」事件が発生した。この事態を重くみた下伊那郡の在郷軍人会によって設立されたのが下伊那郡国民精神作興会（大正十三年十月）で、その中心人物の一人が州平であった。⁽⁷⁾ 州平が作興会の主要メンバーとして青年層の教化に尽力する様子は「日記」にもたびたび登場する。そして、昭和になると州平は新しい国家主義団体猶興社の結成に奔走するようになる。⁽⁸⁾

この猶興社は昭和五年十二月に発足し、反資本主義、反共産主義および既成政党批判を強く打ち出した。⁽⁹⁾ だが、州平自身は猶興社が愛国勤労党南信支部に発展解消（昭和六年八月）していく過程で顧問にまつりあげられ、満州事変後には国家主義運動から離脱していく。⁽¹⁰⁾

以上の興味深い経歴によって、「日記」はすでに多くの研究で利用されている。『長野県史 通史編』第八巻・第九巻（長野県史刊行会、一九八九年・一九九〇年）、須崎愼一氏の『日本ファシズムとその時代』（大月書店、一九九八年）に代表される一連の研究、伊那近代思想研究会会員による論考（柳田國男記念伊那民俗学研究所報『伊那民俗』、同紀要『伊那民俗研究』に掲載）、加藤陽子『昭和天皇とその時代』（講談社、二〇一一年）が主要な成果である。また、これら翻刻関係者、地域関係者の研究のほかに、近年では田上慎二「右翼政治家」中原謹司試論」（『法政史学』七十八号、二〇一二年）を挙げることができる。

今回紹介する昭和五年九月から十二月分の日記は他の年同様に博文

館当用日記にペン書きされている。そして、その巻末に設けられた「補遺」のページには日記の内容を補足する事柄に加え、州平自身による昭和五年の回顧が記されている（「補遺」三頁目以降）。一般に昭和五年といえば昭和恐慌の発生やロンドン海軍軍縮条約問題で知られるが、州平もこれらを例として挙げながら昭和五年を「多事多難な年であつた」と振り返る。そして「自己の事項につきても多事多難であつた」として、「組合に対するもの」、「銀行の方」、「九月の所得税調査委員選挙」、「猶興社」を主要な項目として挙げた。本稿ではこの回顧に沿いながら昭和五年九月から十二月の森本州平とその周辺を概観してみたい。

二 昭和恐慌下の産業組合・百十七銀行

松尾村産業組合⁽¹²⁾の理事は組合長の州平のほか、専務理事の青山金三郎、会計主任の吉川順次郎、第一工場主任の田中句一郎、第二工場主任の江塚佐三郎であった。⁽¹³⁾ 前述の「補遺」で州平は、産業組合に関して「江塚銅像問題」、「事務員の給料支給問題」、「組合員の財的打整」という三つの出来事をあげているが、このうち九月から十二月にかけて大きな問題となったのが「事務員の給料支給問題」と「組合員の財的打整」であった。

昭和五年の九月から十二月というと、繭価・糸価の暴落によって長野県は昭和恐慌の真っ只中にあった。⁽¹⁵⁾ 「組合員の財的打整」とは組合員の家産整理のことを指すと考えられるが、今回の「日記」中には恐慌の打撃を受けたと思われる家産整理の事例が非常に多く登場している。⁽¹⁶⁾ 産業組合ではこのような恐慌への対応策が種々検討されたが、その一つが「事務員の給料支給問題」であった。組合役員会の様子を記

した「日記」十一月三日条には「事務員従業員の減俸に付協議す。此問題に付ては専務他の理事と窃に打合をなし、二割の減俸を予め打合せ置きたるもの、如くなるに付、役員会の初まる前に当りて専務に執行役員よりかゝる問題を付議するは穩当ならず、執行役員は事務員擁護に立つべきを述べたり。役員会に臨めば果して他の役員は二割減俸を主張し、予は之に對して孤軍奮闘して一割五分を主張したるも容る、処とならず。然らば十二月分より行はんと決して散す。青山に、此の如き問題は予め他の役員と相談する前、予に話して了解を得べし、然らざれば大なる困難に陥るべしと告げたり」とあり、減俸の割合に關して組合長である州平と青山専務らその他理事との間に意見の対立があつたことがみてとれる。また、十一月十一日条には「理事会決議録には決議事項と變したる事務員給料十二月より減額あるも、十一月としてあり、之を訂正せり。青山江塚田中三者が常に策謀しつゝ、あるを見る」という記述がみられ、減俸の実施時期をめぐつても同様の対立構図が存在したことがわかる。結局、減俸問題そのものは「十二月より二割を減する事」に落ち着いたが（「日記」十二月九日条）、この問題は組合内の対立構図を顕在化させることとなつた。以上の問題をうけて州平は「組合の事業の方が銀行業よりは面白くもあり、やり甲斐もあるが、併し現在の状況では、予には理事中でも支持者がない。誰も予に對して支持するものもなく、多くは専務派だ。然りとすれば、予が組合へ没頭するには大英断を要するし、且又勤務も中々エライ。実現（現実）よりすれば、イツソ専務を退かしめて、組合に没頭する方かよい。併し銀行の方も難局たと云ふて逃げる事も勿論出来ない。進退兩難に陥つた」（「日記」十一月二十六日条）と弱音を吐いてしまふ。しかし、このことは州平が組合事業に対する熱意を失つたことを

意味していなかつた。卷末の「補遺」（三頁目）で州平は「組合も如何に波瀾があらうとも組合長となつた以上は組合と生死を共にする決心をした」という力強い言葉を記し、昭和六年一月以降、増沢式繰り糸機導入など組合事業発展に尽力していく。⁽¹⁷⁾

昭和恐慌の難局のなかで苦境に立たされていたのは銀行業務も同様であつた。⁽¹⁸⁾ 州平は組合事業への強い想いを記したあとに続けて「銀行は面白くない商売」（「補遺」三頁目）と記してしまふほど銀行業務に消極的であつたが、この年、銀行取り付け関連の問題によつて大いに苦しめられた。

長野県における金融不安は昭和五年十一月六日の信濃銀行（当時、県下一の大銀行）の支払猶予を震源とし、県下諸銀行に波及した。⁽¹⁹⁾ 州平が勤める百十七銀行も例外ではなく、上伊那郡にあつた辰野、高遠支店では緩慢な取り付けが発生した（「日記」十一月二十五日条）。だが「午後銀行へ出勤せしか、既に上伊那辰野地方は人気沈静し、流言も稍静みたる由」（「日記」十一月二十九日条）という記述から、騒ぎはすぐに沈静化したことがわかる。むしろ州平を苦しめたのは十二月二十日に発生した「片桐事件」であつた。行員の「片桐亭次郎」という人物が米投機に手を染め、銀行から担保品であつた伊那電気鉄道・日清紡績などの株券を盗み出すという事件が発生したのである（「日記」十二月二十日条）。州平は銀行の信用を守るべく、各方面と連携しながら「一、犯人取押、二、贓品取得、三、新聞政策」を速やかに実行した（「日記」十二月二十一日条）。「贓品取得」とは盗まれた担保品の奪還をさし、「新聞政策」とは新聞記事の差し止めであつた。幸い十二月二十三日には犯人が逮捕され、取り付け騒ぎなどを引き起こすことなく事件は終結した（「日記」十二月二十三日条）。

三 所得税調査委員選挙と父・勝太郎の存在

「補遺」では「九月」と記されているが、正確には十月初旬に所得税調査委員選挙が実施された。所得税調査委員はもともと明治二十年三月十九日公布の所得税法に基づいて設置された役職で、郡区管内納税者（二十五歳以上男子）の互選による七名以下のメンバーによって構成された。調査委員は納税資格者からの所得金高申告に基づいて決議を行い、郡区長がそれをもとに所得金高を決定した。⁽²⁰⁾元来、高所得者による社会奉仕の側面が強い「名誉職」であったが、明治三十二年二月の所得税法改正により税務署・税務管理局（設置は明治二十九年）の下に移され、専門的徴税機関の設置にともない決議機関から諮問機関へと権限が狭まっていた。⁽²²⁾

この所得税調査委員の選挙に州平は消極的であった。十月二日には出馬を勧める吉川（松尾村村長の吉川亮夫か）と押し問答になっている。しかし、その三日後、「夜に入りてみどりに行く。上飯田町助役今村、鼎林、竜丘代田、川路今村村長及本塩助役居りて予を責め、予の固辞するや父よりの葉書を出して、親公がやれと云ふものを君は如何にするかとの詰問に何と答ふる術もなく、屈従とは思ひつゝも父の命なればもだし難く引受る事とし、代田に頼み一任せり」（「日記」十月五日条）という次第で、出馬が決定してしまう。翌日の「日記」に「父の投けた弾は各村長の頭に轟いて、予を擁立する事は動かなかった」（「日記」十月六日条）とあるように、州平擁立の背景には父勝太郎の存在があった。

結局、州平は最下位ながら無事に当選したが、一連の動きは勝太郎の地域社会における大きさを印象づける。明治以来、下伊那有数の地方名望家として地域に重きをなした勝太郎の影響力は健在であった。

この選挙の三週間後、森本家では勝太郎夫妻の金婚式が開かれた（「日記」十一月一日条）。村内の不景気をかながみて規模を縮小したものの、⁽²⁵⁾祝宴は近親者らを招いて無事にとり行われた。ただ、自らの金婚式に並々ならぬ想いを抱いていた勝太郎は翌日、翌々日にも宴を開いてしまう。このことは昭和恐慌の難局にあつて村治に苦しむ州平に不満を抱かせた。「日記」十一月三日条には「帰宅して見れば、金婚式の慰労会なりとて餅をつき、一般の不況生活困難の模様は知らざるもの、如し。因て父に一般農家の生活困難なる状を述へ更に他にも話したるに、父却て反省せずして気に障りたるもの、如し」とあり、ついに州平が勝太郎に対して苦言を呈したことが分かる。もちろん、年末に「家庭に於ては両親が饗饌として居ることは一番うれしい」（「補遺」三頁目）と振り返った州平であるから、勝太郎の金婚式を喜ばしく思っていないわけではない。ただ、二人の現状認識にズレが存在したことは確かであった。

四 ロンドン海軍軍縮条約問題と猶興社

ロンドン海軍軍縮条約問題が大詰めを迎えていた昭和五年九月十七日、州平は同問題に関する愛国勤労党の会合に出席するため単身上京した。東京での様子を記した九月十八日、十九日の「日記」は記述量が増し、国家主義運動にかける州平の熱意が感じられる。

東京滞在中に州平は愛国勤労党の顧問であつた鹿子木員信を訪問している。⁽²⁸⁾そこで州平は「若し批准が来るとすれば英米は我に猶一層の脅迫するであらふ、併し脅迫すればする程日本の敵ガイ心は熾になつて恰も日清戦争の後今後の敵は露国なりと云はれた様に国民の仮想敵が出来て猶一層日本人を覚醒するによからん、眠つた亡国的にマス

イしつ、ある国民を呼び起すに好都合ならん」という考えを披露する。この発言は、州平のなかでロンドン海軍軍縮条約問題が単なる批准の可否をめぐる政治問題ではなく、日本人の「覚醒」につながる問題として意識されていたことを気づかせる。そして、州平のいう「眠つた亡国的にマスイしつ、ある国民」とは具体的に誰をさすのか、という論点が浮かび上がる。

この州平の発言に対して鹿子木は「其通りた」と答えたあと「何とかして此腐敗せる政事家、権勢家をやつつける方法はないか、此の売国的政府には納税は出来ない和不納同盟をやる事は如何」と続けた。鹿子木がどうやって「不納同盟」という着想を得たかは明らかにしないが、地主経営者でもあった州平はこの案に賛成することはできなかった。州平の理想とする国家主義運動は地主経営と矛盾するものではなかったのである。

以上のように刺激的な東京行を終えると、州平は在郷軍人会を中心に軍縮条約反対運動のための働きかけを積極的に行なった。しかし、どの方面からともこれといった反応はなく、十月一日に枢密院本会議で軍縮条約批准の奏上が決定されると運動は挫折してしまう。

しかし、これによって州平の国家主義運動が停滞することはなかった。猶興社設立が目前に迫っていたのである。「中原謹司関係文書」には、昭和四年十二月十五日の猶興社準備会結成時に作成されたと考えられる「猶興社結成に就て謹て経過並に信条を申上ます」と題する冊子⁽³¹⁾が残されており、「猶興社」云ひうべくんば急進的新日本主義の団体——の結成は勤王思想の郷土的特性よりするも現下の世相より見るも歴史的必然の要求であつて郷土の子国の後続者である私共にせまらずには置かない使命であると云ふ事に帰結しました」という記述から

猶興社という団体の性格および設立の意図をうかがうことができる。この準備会は塩沢治雄、吉野福一、今村良夫の三人を世話人として準備委員四十人、賛助員三十九人（州平、中原謹司を含む）で構成された。

地域の国家主義運動をリードしてきた州平や中原が賛助員にとどまっていたことは意外に感じられるが、そのわけは「日記」十月二十四日条の記述によって明らかになる。この日、猶興社幹部会（出席者は塩沢、吉野、今村、州平、中原）の席上で「猶興社に予と中原が表面に立つや否や」が議題になると、州平と中原は「我等は既に既成政党の色彩あれば、却つて社の為に諸君が進出して吾等は背後より進む方可ならんと思ふ」と述べたが、他の三名が「是非此際両君が出でざれば駄目だ」と主張したため「誰と云はす吾等五人が名を出して進むべし」という方針に決定した。つまり、「既成政党の色彩」ゆえに二人は運動の前面に立つことを躊躇していたのである。

この幹部会ののち、十一月十八日にも猶興社の発会式に関する会合が開かれた。この会合では第十四師団司令部付であった秦真次少将⁽³²⁾の来峽⁽³³⁾にあわせて発会式を開催することが決定された。幹部会の時点で社会学者の赤神良議⁽³⁴⁾を来賓とする予定であったが、直前になって予定が変更されたのである。⁽³⁵⁾陸軍皇道派の系譜に属し、「大川、安岡、綾川、北等と親交」⁽³⁶⁾（「日記」十一月八日条）があつた秦をわざわざ来賓に選んだことは猶興社の性格を考える上で興味深い事実である。結局、猶興社発会式は三十名余りの参加者を集め、無事にとり行われた（「日記」十二月十二日条）。州平は猶興社の設立について「思想団体として作興会を外廓として中心か出来た」（「補遺」七頁目）と記しており、一定の達成感を感じていたようである。

五 おわりに

昭和五年九月から十二月の州平は村政の各方面で苦境に立たされていた。しかし、そのことは彼の村政への意欲を減退させることも、国家主義運動を停滞させることもなかった。昭和恐慌の只中にありながら、州平は読み手の予測をこえてたくましい。

なお、「日記」には本稿で紹介したもののほかにも興味深い話題がいくつも登場する。組合製糸の動向（九月から十一月）や徳富蘇峰の来峡（九月十三日、十四日）、教育勅語発布四十周年関連（十月）、軍人勅諭五十周年事業（十二月）などである。

このように多彩な話題、豊富な論点をあわせ持つ「日記」が今後の日本史研究に与える影響は大きい。国家主義運動研究に限定されない、幅広い「日記」の利用を期待したい。

註

- (1) 須崎愼一「史料紹介―森本州平日記（抄）・（二）」（一五）（神戸大学教養部紀要『論集』三五号～四三号、四五号～五〇号、一九八五年～一九九二年）。
- (2) 「史料紹介 森本州平日記（二）」（四）・（六）（『東京大学日本史学研究室紀要』一一号～一三号・一五号・一七号、二〇〇七年～二〇〇九年・二〇一一年・二〇一三年）。
- (3) 須崎愼一「史料紹介―森本州平日記（抄）」（神戸大学教養部紀要『論集』三五号、一九八五年）の「解題」参照。
- (4) 『松尾村誌』（松尾村誌刊行委員会、一九八二年）、八二五～八七二頁。
- (5) 前掲須崎「解題」参照。

- (6) 『長野県史 通史編』第八卷・近代二、六八五～六八六頁。なお、LYL (Liberal Young-men's Leagueの頭文字) とは青年層指導者であった羽生三七らによる社会主義運動の秘密組織のこと。大正十三年三月、羽生以下二十六人が検挙され、組織は潰滅した（『長野県史 通史編』第八卷・近代二、二七〇～二七二頁）。
- (7) 『長野県史 通史編』第八卷・近代二、七八八～七九一頁。
- (8) 『長野県史 通史編』第九卷・近代三、三五一～三五二頁。
- (9) 『長野県史 通史編』第九卷・近代三、三五二頁。
- (10) 『長野県史 通史編』第九卷・近代三、三五二頁。
- (11) 前掲須崎「解題」参照。
- (12) 正式名称は松尾信用販賣購買利用組合。組合員に対する資金貸与などを行なう信用部、組合員の委託を受け生産物を販賣する販賣部、必要物資を購買して組合員に売却する購買部、養蚕・製糸業の施設を整備して組合員に提供する利用部によって構成された。大正元年には組合員数三百二十人、出資金一万五千四百二十五円であったのが、昭和十七年には九百九十三人、十九万五千三百六十四円となっている（『松尾村誌』五一〇～五一六頁参照）。
- (13) 『松尾村誌』八六二頁。
- (14) 江塚銅像問題とは産業組合初代組合長であった江塚善三（昭和四年二月死去）の銅像建設地をめぐる問題。鳩ヶ嶺八幡宮境内への建設の可否をめぐる組合内に対立が生じ、組合長であった州平に対する批判に発展した。この批判は州平を大いに悩ませたようである（問題が大詰めをむかえた昭和五年三月には辞表を準備している（周囲の説得により辞任は取りやめ）。結局、同年三月二十八日に開かれた組合惣代協議会において、八幡宮境内ではなく

「桜畑」（八幡桜ヶ丘）に建設することが決定され（「日記」昭和五年「補遺」の一頁目）、五月四日に除幕式が無事に執り行われた（一連の過程は「史料紹介 森本日記（三）」（『東京大学日本史学研究室紀要』一三号、二〇〇九年）参照）。

- (15) 松尾村では昭和四年時点で収蘭量八万三千六十八貫に対して蘭価は五十六万八千八百十八円（二戸当り蘭価は九百六十二円）であったが、昭和五年には収蘭量七万九千三百三十八貫に対して蘭価は二十二万三千四百五十一円（一戸当り蘭価は三百六十七円）にまで下落した。昭和五年以降も蘭価の下落は継続し、昭和六年、七年には二十万円台を割り込んだ（第七八表 養蚕戸数・収蘭量および価格―下伊那郡町村）（『長野県史 近代史料編』別巻・統計（二）、三三六―三四四頁）参照。

- (16) 「日記」中では「整理」と表現される。

- (17) 「日記」昭和六年一月（東京大学大学院日本近代政治史ゼミ「史料紹介 森本州平日記（六）」（『東京大学日本史学研究室紀要』一七号、二〇一三年）参照）。

- (18) 州平が勤めた百十七銀行は昭和五年時点で支店数十四、公称資本金四百万円（払込資本金二百七十七万五千円）という中小銀行であった。昭和四年の預金額は当座百十二万二千八百四円、特別当座五十九万七千七百五十五円、定期三百三十一万百二十八円であったが、昭和五年にはそれぞれ当座七十四万八千四百二十円、特別当座三十五万八千五百十円、定期二百五十七万三千八百四十三円と大幅に減少している。また、昭和四年まで〇・〇七％であった利益配当率は昭和五年に〇・〇六％、昭和六年上半期に〇・〇五％まで下落し、昭和七年、八年には利益配当は停止され

た（第二三八表 普通銀行資本金および預金・貸付別金額―主要銀行（大正十四年―昭和十一年））（『長野県史 近代史料編』別巻・統計（二）、五六三―五六四頁）参照。

- (19) 『長野県史 通史編』第九巻・近代三、一九八頁。

- (20) 大蔵省主税局編『所得税百年史』（大蔵省、一九八八年）参照。

- (21) 鈴木芳行「所得税導入初期の執行体制―東京市の所得税調査委員を中心に―」（『税務大学校論叢』五十一号、二〇〇六年）六一七―六一八頁。

- (22) 高木勝一『所得税改革の発展と歴史』（ぎょうせい、二〇〇七年）二二頁。

- (23) 選挙前に上飯田町の造反騒動が発生するも（「日記」十月七日条）、最終的に無競争選挙に落ち着き（「日記」十月八日条）、州平は最下位六十八票で当選した（「日記」十月十日、「補遺」三頁目）。

- (24) 森本勝太郎（一八六一―一九三三）は明治十五年の戸長就任を皮切りに村会議員、県会議員、郡会議員（郡会では議長も務める）を歴任した。また、松尾村村長を二度務め（明治二十八―三十二年、大正三―昭和四年）、昭和四年一月には自治行政に功績があったとして全国町村長会長から表彰を受けている（『松尾村誌』七九―七九四頁参照）。

- (25) 「日記」十月三十日条参照。

- (26) 「日記」十月二十六日条、十月三十日条参照。

- (27) 鹿子木員信（一八八四―一九四九）は大アジア主義の思想家、九州帝国大学教授。哲学を専攻し、慶応義塾の教授に就任、大正七から八年にはインドに滞在。大正八年に北一輝・大川周明・満

川亀太郎を中心として猶存社が成立すると、これに参加した。同十二年にはヨーロッパ各国に留学し、同十五年、九州帝国大学法文学部教授に就任。なお、昭和二年にはベルリン大学に招かれ、三カ年在独して『日本精神史』の講座を担当している（宮本盛太郎「九大教授時代の鹿子木員信に関する若干のメモ」（『政治経済史学』二〇〇号、一九八三年）、同「鹿子木員信の「インド体験」（『人文』第二九集、一九八三年）参照）。

(28) 森本らの鹿子木邸訪問は九月十九日のこと。以下、鹿子木員信とのやり取りはすべて同日の「日記」から引用。

(29) 鹿子木員信はインド通の知識人として知られたが、インドでは反英運動の一環として租税不納運動が展開されていた（「租税不納の同盟組織 インド国民議会の決議」（『東京朝日新聞』昭和五年五月十六日、朝刊二面）。

(30) なお、鹿子木との対談は盟友であった中原謹司にも伝えられたようである（「日記」九月二十二日条）。中原の昭和五年の手帳にはその内容を書きとめたものと思われる「鹿子木員信先生」（中村屋）目黒。ニアリ」と題するメモがあり、中原は鹿子木を「尖鋭化の人」と評している（「中原謹司関係文書」（国会図書館憲政資料室所蔵）、三八六〇）。

(31) 「中原謹司関係文書」一六五一。

(32) 秦真次は福岡県小倉市出身、陸士二期。昭和五年八月に第十四師団司令部付となっていた。陸軍内では皇道派に属し、憲兵司令官、第二師団長などを歴任した（秦郁彦『軍ファシズム運動史』（河出書房新社、復刻新版、二〇一二年）、六三―八二頁参照）。

(33) 「来峡」とは外部から下伊那地方を訪れることをいう。秦の来峡は青年訓練所指導員会に出席するためのものであった（「日記」十二月十二日条）。

(34) 赤神良譲（一八九二―一九五三）は東京帝国大学出身の社会学・政治学者、明治大学教授。大正十二年に明治大学教授に就任し、昭和十五年に同大政治経済学部長となる。昭和二十一年には「ソ連に於ける戦時共產主義の実証的研究」により政治学博士となる（『政経論叢』（第二二卷、一・二号、一九五三年）参照）。

(35) なお、赤神は予定通り来峡し、作興会主催の青年幹部講習に出席している（「日記」十一月二十二日条）。

(36) 「大川」は大川周明、「安岡」は安岡正篤、「綾川」は綾川武治、「北」は北一輝もしくは北吟吉と考えられる。